
真剣で急け者に恋しなさい!

ブラッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で急け者に恋しなさい！

【Zコード】

Z07570

【作者名】

プラッド

【あらすじ】

これは私の作品『D・C・?』やる気があるのかないのかわから
ない転生者の生活』の主人公の転生先がもしも『マジコい』の
世界だったらのお話です。

ヲタ神に手違いで殺害された、主人公はチート能力をもらつて、マジコいの世界にと、赤ちゃんからスタートする。主人公は孤独の女の子と友達になり、風間ファミリーの一員として、急け、慣れ、嵐を呼ぶ。やるきがあるのかないのかわからない主人公が繰り広げる、あり得たかもしれない物語とは……？

もしも城の転生先が (前書き)

他の作品が完結していないのに、また新しい小説を書き始めたブランドです。

マジ恋面白いですね～的な乗りで書きたくなつたので書きました。
更新は遅いですが、他の作品と同時に進められるように努力します。

もしも城の転生先が

じこわん「わしのマスで人生を不意にしてしまつたからね。その代わりと云つてはなんじゃがお主を『マジコ』の世界へと転生してやる!」

城「なんだつて?味濃い?」

じこわん「マジコじゃー』真剣で私に恋しなやー』とこうゲームの世界に送つてやると云つておるのじゃー!..」

聞いたことがないな…… Hロゲか?

城「遠慮しちゃます。面倒だし」

そんな得体もしれない世界に行って、だるこことて巻き込まれたらどうするんだ!俺は一ートを希望しているんだぞ!

じじこ「断るな!..神様自ら、人生をやり直させてやると云つてこるんだぞ!..それを無下にやるなど!..」

神様なのかよ!こつ。田髪にハゲ頭のこいつが?

城「マジコ?……ねえ。どんな世界観なんだ?」

じじこ「つむ!それはじやな

「

急にテンションを上げて、語り出すじじこ。ヲタクのかよ。神のくせに……

カクカクシカジカ、……

城「死亡フラグが盛りだくさんだな」

瞬間回復とか、レーザーとか、空中を自在に動けるとか、バス停を片手で振り回せるとか……人体を越えている。そんな歩く核兵器がいる世界なんて行きたくない。

じじい「安心せい。お主が向ひつの世界で生きれるよつて、チート能力をやろうではないか」

城「どんなの・」

レーザーに太刀打ちできる程の力があればいいんだが……」

じじい「そうじゃのう……まずはお主の身体能力を、綾崎ハ テの5倍程に上げてやろうではないか」

あの借金執事の5倍つて……その時点でもチートすぎる。新幹線に轢かれても生きれるんじゃね？

じじい「それと、気を扱えるようにしてやろうではないか。頑張れば破壊光線を放てることが可能じゃ。しかし、なにもせぬままだと

なんにも意味がないぞよ」

努力しなひことか……

城「わかつた。それでいい」

だるいが、なにもせずに力を得れるのだから、多少の苦は瞑つてやるか。二ート希望だが、人として機能してやないのは嫌だからな。

じじー「容姿の変更はするかの?」

見た目を変えられるつことか? そうだな……

城「いや、必要ない。今回まゝのままでいい」

じじー「今回まゝお主が転生するのは初めてじやぞ?」

城「知つてゐる」

頭の奥から、そつと言えつて誰かからの電波が届いたんだよな……。
……俺の頭ん中には小人でも住んでこるのはどうつか。ちょっと心配になつてきた。

じじー「変なやつじやの?……まあ、お主はそしやの顔をしてこ
るから、変更せぬでもよいか」

じじーに言われても嬉しくもなんともない。

じじー「では善は急げ、じや。今すぐにお主を転生させてやります
わ」

じじいが地面に杖を付くと、俺の足元から黒い穴が発生した。

じじい「がんばれよ――――」

白いハンカチを振つてゐるじじいに、復讐心を抱きながら、俺は落ちていくのであつた。

もしも城の転生先が

(後書き)

素人なりに頑張ります

プロローグ～幼少期編～（前書き）

いきなり、EDフラグを叩き折ります。リュウゼツランルートが好きな人はシャットダウンするか、電源をお切りください。

プロローグ～幼少期編～

川神市　どこかの河原。

？？？「…………」

少女は歩いていた。歩き方は危なつかしく、千鳥足のようにふらふらと。

この少女の名は榎原小雪さかきばらこゆき。白い髪と肌に紅い目が特徴的な女の子だ。他にも普通の女の子が持っていないであろう特徴がある。それは全身……服を着ているのでわからないだろうが、無数の傷跡が付けられているのであった。

これは彼女の母親にされたもの。小雪がなにかしたんじゃなく、むしろ良い子であつただろう。だったらなぜか？ただの虐待だ。

母親のきまぐれで、殴られ、首をしめられ、ご飯を抜きにされて、刃物で切られたり……等と数々の仕打ちを受けていた。

しかし、小雪は必死に好かれようと努力をしてきたが、それは無意味であまりにも残酷な結果だった。

笑っていたら、殴られる。自分の大好きなマシュマロを上げようとしたら、蹴られる。

彼女が通っている小学校でも、蔑まれていた。小雪に近づくものはばい菌扱いされるという、なんとも陰湿で子供っぽい虐めを受けていた。

そんな日々が続いていき、小雪の精神は日に日に削られていった、ある日のこと。

空き地で子供たちが遊んでいた。

楽しそうに。

みんな笑顔で。

そこはとても光に満ちていた。

小雪は原っぱから遊んでいる様子を見ていた。自分も仲間に入れてもらおうと思っていたが、行動には移す事ができなかつた。拒絶されるのが怖くて……

数週間が経ち、母親に虐待され、子供たちを見ていた小雪だが、これ以上安息の場所がない状態で生活していくのは自分の心が崩壊する。そう悟つた小雪は大好きなマシュマロを握り締めて、彼ら……空き地で遊んでいた子供たちの仲間に入れてもらおうと決心した。

それで、小雪はやたらと氣取つた男の子に話しかけたのだが……

「ヒルな男の子「悪いな、店員オーバーだ」

呆気なく断られてしまつ。

めげずに、何度もマシュマロを握り締めて会いに行くが、断られる。その繰り返し。

完全に拒絶の言葉を投げかけられた小雪はマシュマロを握りしめながら、独り河原を歩いていた（冒頭に戻る）

断られた。もう何回目だかわからないくらいに会いに行つてみたけど、今日も断られた。

ずっとひとりぼっちは辛くて、寂しいから、仲間に入れてもうおつと思つたけど、だめだった。

ぼくの大好きなマシュークロを上げても、彼からの返事は変わらなかつた。

友達が欲しいよ……。もう一人ぼっちは

小雪「うわー」

????「あいたつ」

地面を見ながら歩いていたから、誰かが前から来ているのに気が付かず、ぶつかってしまい、ぼくは尻餅を打ってしまった。ぶつかった人に謝ろうと、ぼくは地面に付いたまま、顔を上げた。
そこには

s i d e → 柿原小雪 ← o u t

s i d e → 一条城 ←

第一の人生をハゲじいさんに与えられてから、落ちている途中に、意識が無くなっていた俺は目を覚ました。この世界で初めて目に移つたものは

女性「見てあなたーー！」の子が目を開いたわよーーー！」

男性「おおー!なんと凛々しい顔立ちなんだ!決めたー!」の子の名前
は池面(こまい)しづくーーー!」

ほんわかとした女性が俺を抱いていて、ドランティーな男性が俺の顔を覗きこんでいた姿でした。

まさか……赤ちゃんからかよ！？

池面「行つてきまーす」

母親？「行つてらつしやい。暗くなる前には帰つてくるのよ」

あれから数年が経つた……つてこりゃ……俺の名前は一條城だ!! そんなわけのわからん名前じゃない!!

え？さつきは池面つて名付けられていただろつて？バカやろーーーー！今も前世も俺は一条城だ！！両親がその名前で呼ぶ時は全てスルーしていたら、名前を城に変えてくれたつての！でも名前の由来が「将来、童話に出てくるよつなお城を建てれるように」なんて不純極まりなかつたが。

城「はーい」

そう。それが正解。母さんに手を振つてから家を飛び出る。この人は一条優姫さん。俺の母親だ。長い黒髪に黒い瞳と、大和撫子みたいな容姿をしている。おつとりした性格で父さん曰く、癒し系らしい。父さんの名前は一条疾風さん。容姿はネギまのタカミチマンまだ。性格は真反対で、豪快でいつも突拍子のないことを言う人だ。転生先の名字が一条には驚いたが2人共優しくてよい人だ。

俺の身体能力についてだけど、小学生に上がるころに、父さんから趣味の剣道をやらないかと誘われた事がある。道場はなかつたので、庭でやることになった。父さんの実力は全国大会でベスト4に入つたことがあるらしい。なのに、初めての立会いで園児相手に本気を出すという、なんとも大人気なかつたのだが……

勝つてしまつた。

園児が大人に。年の差が5倍以上はあるのに。前世の青年の時よりも体が軽く、力が何十倍もあつた。母さんたちがどんな反応を取るか、気になつていたんだが……

優姫「あらあら～お父さんをやつつけちゃうなんて。城ちゃんはすごいわね～」

と、全然気にしていなく、いつもの雰囲気で。少しは疑問に持たないんですか？
父さんはといふと……

疾風「ははは。ちょっと油断しちやつたよ。次は本気を出すから覚悟してね？」

再戦を挑んできた。あなた最初から全力で来てませんでしたか？まあ、一度負けたから一度目も勝てるはずがなく……

疾風「は、ははは。また油断しちゃったよ。え？さつきも同じ事言つてなかつたって？ゆ、油断の種類が違うんだよ…さ、竹刀を構えるんだ！」

油断の種類つて……そんなのがあるのか？で、一度あることは三度あるといつよいに……

疾風「や、やるじゃないか……けど、次は……え？もうだるいから諦めろつて？なにを言つんだい！勝負はまだまだこれからだよ！…え、始めよつか！…！」

これの永遠のループ。ぶつたおしては、復活して、ぶつたおしては、復活しての繰り返し。結構本氣で叩いているのに、中々氣絶しなかつた。最後は母さんが止めに入つて、なんとか抜け出す事が出来た。父さんは駄々を捏ねまくつていたが、母さんが目にも留まらぬ速さで、父さんの首に手刀を叩き込んで氣絶させて、家に引きずり込んでいった。

……普段怒らない人が怒ると怖いって言つのは本当なんだな。俺は母さんを怒らせないよつに誓つた日もある。

とまあ、こんな感じかな？この後でわかつたことなんだが、俺の体内には気が流れているらしく、父さんと上手く扱えるために毎日特訓をした。その成果身体能力も向上し、自分の周りに障壁を作り出せるくらいには成長した。

家は一軒家でそこそこ裕福だし、学校面では成績は優秀だし（素行は酷いが）、友人面も問題ない。今日はその友人たち……風間ファ

ミリー」という集団に俺は属している。

昨日までは家族と2週間の長旅をしていて、家を留守にしていたので、遊んでいなかつたが、今日からまた遊ぶようになつたのだ。風間ファミリーの人数は女子3人。男子は俺を含めて5人の計7人で活動している。詳しい説明は会つてからでいいか。

俺は旅行土産を片手に、前方を気にせず走っていたため

????「うわっ」

城「あいたつ」

誰かとぶつかつてしまつた。俺の方は軽く仰け反つたくらいだが、相手の方は尻餅をついていた。

……しかも女の子かよ！新雪を思わせるような肌と髪に……ん？なんかこの子……見た感じだと、酷く衰弱していないか？

女の子「……」

城「すまん。ちょっと俺の不注意だつた。大丈夫か？」

どう考えても俺のせいなんだがな。取りあえず女の子に手を差し伸べる。

女の子「……え」

城「ほい、グイーン」と

掴もうとする気配がなかつたので、俺が一方的に立ち上がらせた。多分…… 同い年くらいか？けど、学校では見たことがないな……。

城「怪我はないか？」

女の子「…………」

無反応。女の子の紅い瞳とは裏腹に、弱弱しい瞳で俺を見つめてくる。

城「…………聞こえていますか？」

女の子「…………」

城「あの～～～」

女の子「…………」

城「もしも～～」

女の子「…………」

かめよ～～うん。全然反応してくれない。この子の視界には俺が移っていられないんだろうか？ それとも失明者か？
……んなわけないか。松葉杖も持っていないし。

女の子「あ、あの…………」

お、やっと喋ってくれた。小さく聞き取づくらに声のボリュームだつたので、耳に神経を集中させ一言一句聞き逃せないようだ。

女の子「マシコマロ…………食べるっ！」

女の子の右手から、握りつぶされ、形が変形していったマシュマロが差し出された。なにマシュマロ？全く持つて脈絡がないんだが。

城「……えーっと

女の子「……

今すぐでも崩れ落ちしちゃうな、儂のイメージを俺に通かせてきた。
差し出されたマシュマロを見つめて、ちりっと彼女の顔を窺つてみた。

その瞳は不安で揺れていって

俺の手も小さこ手の平の上に乗った、マシュマロを取つて食べ
る。長い時間握っていたのか、温かくなつていて、お世辞にも美味しことは言えない。

城「ああ…………きひつや」

……

女の子「…………おこじー？」

城「あーうん。まあまだったな

女の子「…………」

俺の感想に俯く女の子。え？なに？今の俺が悪いのか！？なんか肩

が震えてこるしー。」んなとーで泣くなよー。あーもつーべつすつち

……そりだー。

城「ほ、ほりこれーみみせー。」

お土産として持っていた長方形の箱を開けだして、中に入っていた袋に入ったシュークリームを渡す。旅行の土産がシュークリームっておかしくない?とか思うかもしねーが、父さんが買ったものだから、俺は知らん!ー!

女の子「くれるの……?」

シュークリームを両手に乗せたまま、顔を上げて虚ろな瞳で俺に聞いてくる。

城「マシュマロのお礼だ。気にせず食つていいくだー」

マシュマロ一 個と200円のシュークリームじや、割りにあわないが。
女の子「…………まむつ」

薄桃色の小さな口で、シューこ麺ぶつぶつ。

城「美味しいか?」

わつか女のが聞いてきたことを、俺が聞いてみる。

女の子「モグモグつ」

城「慌てて食べるなよ。隣に誰もいるかもしないだ

女の子「…………モグ…………ひりく…………おこ…………」

ちよ、結局泣くんかー……俺なにか眞に触る」とでもしたー?

城「な、なぜ泣くー?」

女の子「…………といても…………美味しくて…………ひりく…………暖かか
つた…………から」

え?このシュークリーム冷蔵庫で冷やしていたやつなんだけビ
ルのマハロヨウツマムラのせすだ。

女の子「ぐすり…………誰かから…………プレゼントをもらひなんて…………はじ
……ひりく…………めでだから」

泣きながらシュークリームを食べ続ける女の子。もしかして……孤
独なのか?やせ細った体。傷は治つていいみたいだが、この跡は……
……虐待でもされていたのか?火傷とかの皮膚はそう簡単には誤魔化
すことができないし……。

城「…………やうか」

俺は女の子が泣き止み、食べ終えるまで、ずっと頭を撫でていた。

城「いませりだが、血口紹介がまだだったな。俺は一條城。君の名前は？」

女の子「……神原小雪」

城「小雪だな。俺のことは好きに呼んでくれ」

小雪「……じょう?」

城「ああ」

小雪「ジヨウ……ジヨウ」

確認するかのように、俺の名前を何度も呟く小雪。

城「よし、これで俺と小雪は友達だな」

小雪の手を空いている手で握る。

小雪「え……?」

城「お互いの名前を呼び合つた時から、友達なんだぜ?だから、俺と小雪は友達。嫌か?」

小雪「(ふるふる)嫌じゃ……ない」

首を横に振り、否定する。

城「良かった。これで嫌だなんて言われたら泣き出すんだよー?」

な、なんでもま

小雪の田から、また大量の涙が地面に零れ落ちていった。

小雪「うれしいの……ずっと…友達がほしかった…から」

やつぱり、今まで独りだつたつてわけか……小雪の親はなにをやつているんだ？こんな状態にまで放つておくなんて……いや、それよりも酷い扱いを受けているかもしけないな。……一度探しを入れてみるとするか。

城「なら、今日は記念日だな。小雪の友達記念日だ」

小雪「……友達記念日……？」

城「そうだ。今から俺の仲間たちに会いに行こうと思つているんだが……小雪はどうする？」

俺の手を握っている手に力が僅かに籠る。……悩んでいるのか？

城「安心しろ。みんな俺よりもガキだが、仲間想いのいいやつだ。お前を否定するやつはいない」

小雪「ほんとう？」

泣きまくっていたので、瞼が赤くなっている。

城「ああ。だから、もう一步踏み出せつぜ？今の小雪はまだ片足しか踏み出していないんだからな？」

小雪を苛めるやつは俺が成敗してくれる。

小雪「…………」

城「ほらほら、そんな辛氣臭い顔すんな。なにかあっても俺が守つてやるからさ。笑顔で行こいつか」

笑いかけてやる。少しでも不安が取り除けるよひー。

小雪「…………」

繫がれていない手で、田を「じー」と拭き、初めての笑顔を向けてくる。笑うとかわいいじゃないか（言つておぐが俺は（21）ではない）

俺と小雪は仲良く手を繫ぎながら、風間フマミローがいるであろう空き地に向かった。

城「とゆーわけで、彼女をフマミローに加えようと城さんは思ってます」

小雪「…………」

空き地で野球をしていた、みんなを呼び集めて、そう提案する。

いまだに小雪とは手を繋いだままだが、空き地に入つてから小雪の握る力が強くなつたのは、よくわからない。

「ヒルな男の子」「いや……なんで?」

この場にいる全員が思つたであろう「ことをファミリーーーの切れ者、軍師直枝 大和《なおえ やまと》が俺ではなく、小雪を睨んで言つてきた。大和に睨まれ、小雪の肩がビクンと跳ねる。

城「俺の友達だからだ。文句あるか?」

大和「と、友達?」
「いつとか?」

城「人を指で指してはいけないぞ。ま、なにか言いたいことがあるなら、遠慮なく言つていいいぞ。聞き入れるかはわからんが」

一応みんなの意見は聞いておく。本当に聞くだけだが。

影の薄い男の子「この子には悪いと思つけど、僕は反対だな。どこの誰かも知らない人はちょっと……」

控え目な女の子「……わ、私も……」

始めに反対意見が出たのは、上から普通より、普通なジミーこと師岡 卓也《もうおか たくや》。ゲームやアニメ、漫画好きなので、なにかと話が合つやつだ。みんなからはモロと呼ばれている。俺はジミーかモロと呼んでいる。

で、下の方は小雪と似た雰囲気を持っている女の子。椎名 京《しいなみやこ》。とにかく人見知りをして、ファミリー以外の連中とは関わろうとしない子だ。

城「ジミー、つむる。お前はそんな一般的な発言しかしないから、いつまで経っても脇役のままなんだぞ？」

モロ「酷いよ！確かに僕はみんなに比べれば特徴がないかも知れないけど……モブキャラの人よりは影は濃いよ！！」

城「いいか、京？お前はもう少し交友関係を広めていくべきだ。ここが居心地が良いのはわかる。でも、だからと言って、俺たち以外のやつと会話をしないのは、後で大変になるぞ？」

モロ「うわっ！すつ！」大胆に無視された！！

ジミが喧しいが、一旦小雪から手を離して、俺は京を「というが、なにこの京と僕の対応の差！？あまりにも差が激しそぎない！？」説得する。小雪と手を離した際に、俺が京の前に移動すると同時に、すぐに小雪も俺の背中を追ってきた。

京「……わかった。私はこの子と一緒に遊びたい」

モロ「ええっ！？そんなあつさつと！？」

京は物分りが良くて楽だ。どつかのジミとは大違いだ。

城「京は賛成と……モロはどうなんだ？」

モロ「どうせなにを言つても無駄なんだつね……僕も賛成でいいよ」

陥落成功。なんだかんだ言つてこいつらは優しいからねえ。

城「モロも賛成……と。それで、一番にか言いたいのはお前らだろ？大和、岳人？」

一番の難関でもある大和と、やたらと筋肉質な男……島津 岳人《しまづ がくと》の前に立つ。

岳斗「あつたりめーよ。久しぶりに帰ってきたと思ったら、こんな得体もしれないガキを連れてくるな」

城「岳斗、うるさい。お前はいつもそんなガキみたいなことを言っているから、女の子にはモテないし、いつまで経ってもゴリラのまなんだぞ？」

岳人「モテない言つな！てか、誰がゴリラだ！！俺は人間だ！！！」

城「はい、これお土産のフィリピン産のバナナ」

岳人「お、サンキューな」

岳人をからかうために、家から持ってきたバナナをシュークリームの入っている箱から渡して、皮を剥いて食べ始めるDK。

モロ「食べるよ……本当にゴリラだよ」

バナナを頬張る幼馴染の姿にため息を吐き呆れるモロ。いつか、岳人のことを学会で発表しよう。

城「岳人は賛成でいいよな？」

岳人「おひ……なんでもいいぜ」

モロ「餌付けされてるよー?」

バカの相手は本当に楽だ。これからもバカな岳人でいてくれよ。

城「これで賛成数が3人……と。あ、忘れていたけど、これ沖縄のお土産ね」

モロと京にシュークリームを渡す。

京「ありがと!」

モロ「なんで、沖縄のお土産がシュークリームなのさ……」

それは父さんが独断で決めたからです。

城「さつきから黙つてばっかだが、ワン」「桃先輩はどうち派なんだ?」

ずっと俺たちのやり取りを見ていた、2人の女の子に問いかける。

ワン子?「あたしはどうちでもいいよ。みんなが賛成ならあたしも賛成。反対ならあたしも反対」

百代?「私もだ。それよりも城~。あたしと戦おうぜ~」

犬の尻尾のようなポニーテールが軽く揺れて、答える女の子……^{かずこ}一子。もとい、ワン子は賛成でも反対でもない派のようだ。こいつは風間フアミリーのこ~^{マスコットキャラ}的な存在だ。良く俺に餌

を強請つてくる。個性が強い子である。

同じく、もう1人のショートヘアで気の強そうな目をした女の子。
：俺の1つ年上の川神 百代先輩もどっちでも良い派らしい。こつ
ちもまた一癖ある人で、毎回俺に勝負を吹つかけてきてはやられる。
父さんみたいに負けず嫌いで何度も再戦してくるが、俺にやられる
の繰り返し。モモ先輩は決して弱いわけじゃない。むしろかなり強
いのだが、相手が悪い。チート能力の俺にはなすすべがないだけだ。
正直言つて……戦うのはだるいです。

城「だるいから、嫌だ。はい、ショートクリーム」

モモ先輩の挑戦を適当に断り、2人にショートクリームを上げる。

ワン子「わー、ありがとー」

百代「もぐ……こんなで私を懐柔しようつたって……モグ……そ
うはいかないからな」

食いながら言つても説得力はありません。

城「てことはワン子も、モモ先輩も賛成つてことだ……。残ったのは大和だけになつたわけだが……」

みんなの視線が一斉に大和に集まる。

大和「……キャップなしで決めていいのかよ」

最後の悪あがきにここにはいない、風間ファミリーのリーダーの名前を挙げる。

城「いいんだよ。キャップがない間は俺がリーダー……俺が正義だ」

大和「それにしてはやり方がすげえ強引だと……いえ、なんでもあります」

城「よろしく」

拳を掲げただけで、平謝りをしてくる。力こそ正義…とまでは言わないが、相手を屈服させるのにいい手段だ。

城「んじゃ、大和も小雪が加入するのを認めるんだな？」

大和「（……小雪つていうのか）もう決定事項なんだろ？だつたら別にいい。キャップがここにいたらすぐにでもOKしそうだし」

「いいぜ！俺はこの風間ファミリーのリーダー風間 翔一《かざま しょういち》だ！今日からお前もファミリーの一員だ！」なんて言うのが目に見えている。

つーかさ、わかつていたなら始めから賛成しどけっての。だるいだろうが。

城「なんだかんだで、全員賛成か……だつてよ、小雪？」

俺の背中に隠れている小雪を、前に出す。

小雪「え……？」

みんなの好機の視線に戸惑う小雪。俺の顔を見たり、みんなを見たりと忙しい。

城「自己紹介だよ。自己紹介」

小雪「…………」

「くじと頷き、一歩前に歩み出る。

小雪「さ、榎原小雪ですかーよ、よろしくおねがいしましゅーーー！」

囁みまくりだつた。小雪は「あつーーー」白い顔を沸騰したやかんの
ごとく、真っ赤にして俯いている。

小雪の第一印象はみんなにはどう移つたか？

『あ、あはははははははーーー』

笑われた。みんな腹を抱えて笑つてゐる。

小雪「ジョウーーー」

小雪は泣きそうな顔で俺を見てくるが……

城「んな情けない声を出すな。みんなを良く見り」

小雪「…………ふえ？」

みんなの顔は笑顔で

誰も小雪を拒絶しようとほしない

瞳で見ていた。

小雪「あ……」

「ここからは天の声。

ずっと憧れていたものを手に入れることができた小雪は……その場で泣き崩れてしまった。城と新しい仲間が慰めたりとするが、小雪は城の時よりも泣きじゃくっていた。泣き止んだ後はみんなで乐しく、野球をして遊んだ。

この口から榎原小雪は風間フマミコーの一員となり、城とフマミコーの歴史と幸せな日々を過ごしていく。

そして……ありえはしなかつた歯車が、物語として動き出すのであつた……

数日後に、小雪が一人で風間ファミリーに入ろうとして、大和が断つたことを知った城が、大和をお仕置きしたのは別の話しだる。

プロローグ～幼少期編～（後書き）

時系列が複雑なので、一子の苗字は出していません。

主人公設定（前書き）

詳しいことはD・C・?の設定で。

主人公設定

一条 城《いちじょう ジョウ》

基本的な設定はD・C・?通り。
やるきなし、めんどくさがりで、人外な身体能力を持つている。
唯一違うところは『全てを思い通りにできるといどの力』がないこと。

D・C・?よりは少し丸く収まった。

容姿

父母にはまつたく似ておらず、髪の色は白銀で瞳のカラーは京と同じ紫。髪型と顔立ちは銀魂の沖田をモテルにしており、目が若干沖田よじつり目。

原作開始時のデータはこんな感じ

身長 177センチ

体重 66キロ

誕生日 6月6日

所属クラス 2・F

好きなもの マシュマロ カレー 炭酸飲料

嫌いなもの 料理という名の暗黒物質 めんどいこと いじめっ子

トランプ等のカードゲーム（運がないので常に負けるから）
ヤンケン（勝率は5パーセント以下） ジ

趣味 読書（主に漫画） ゲーム全般

能力

幸運	A	E	E	E
魔力	+	X	X	X
俊敏				
体力				
筋力				

魔力が足りればあらゆる世界の技が使えることも可。

プロローグ～学生編～（前書き）

長いー！説明文が多いー！そして小雪のキャラがむずいー！

プロローグ～学生編～

4月1-8日 土曜日 一条家、城の部屋。

城「…………」

？？？「城～。起きる～、朝～、新学期だよ～」

誰かが体を揺さぶって、俺の睡眠を邪魔する……嫌だ～～～。
この温かい羽毛のような感触から離れるのはいやだ～～～。なんで、
土曜なのに学校があんだよ～～～マジだりいよ～～～そばりたい
～～

城「あと……30分」

？？？「う～～～。早く起きな～～と、す～こ～とする～～」

バシバシと布団越しに叩いて警告をしてくる。凄い事～～～？んな
ことより、俺は睡眠を優先します～～～…………

？？？「よーしつ……えいっー！」

ボスッ！

城「いふあー！」

突如腹の辺りに、なにかの衝撃がやつてきた。ぐふう……これは腹
に乗つかつてきやがつたな！

城「お、重い……」

? ? ? 「むー重いって言つたなー…それ、それつ」

ボスツ、ボスツ、

城「ぐ、がはつ、と、飛び跳ねるな……」

何度もなんかの柔らかいものが、腹に衝撃としてくる。

? ? ? 「だつたら、起きる。朝だぞー」

城「わかつた、わかつた」

上半身を起き上がりると、田の前には我が幼馴染の顔が、笑顔で俺を見ていた。

城「起こすときは、体に乗るなつていつも言つているだろ……」

案の定、俺の腹をイス代わりにして座つてやがった。

? ? ? 「だつて、こうしなこと起きないじゃーん」

所在なげに足をぱりぱりとむせび、悪びもせずに答えてきた。

城「はあ……まあいいや。取りあえず、そこからどうしてくれ

? ? ? 「へーい」

素直に聞いてくれ、ペローンと飛び上がって、着地する際に両手を

広げてポーズを決めていた。

俺はベットから抜け出し、幼馴染の前に立ち

城「おはようユキ」

小雪「おっはよー城」

小雪と朝の挨拶を済ませた。

ユキが風間ファミリーのメンバーとなつてから数年が過ぎ、俺たちは高校2年生までに上がつた。それまでには色々なことがあつた。母親に虐待を受けていたユキをファミリー全員で、家に突撃して現場を激写する、母親を殴りまくるモモ先輩。川神院……ワン子とモモ先輩の実家に通報し、母親逮捕。ユキはそのまま保護されて新しい、保護者が引き取つてくれる事になつた（その時の苗字も榎原という、偶然があつた）

引きとつてくれた人たちは、初老の夫婦だつた。お一方はとても優しく、穏やかな人たちで安心して小雪を育ててくれるであろう人たちだつた。

そして、ユキがいじめられていること小耳に挿んだ俺は、ユキの通つている学校に乗り込んで苛めていたやつらをしょけ　　トラウマになるくらいの苦痛を味あわせてやつた。ユキは「城とみんな

がいてくれるから、別にいよいよと大した興味もなく言つてきただが、俺は止められなかつた。

で、そのことを榎原老夫婦が知つた翌日に、俺とファミリーが通つている学校に転校してきたのは……さすがに驚いたよなあ……俺のクラスに。自己紹介をする前にユキが俺を見つけると否や、すぐさまに抱きついてきて、キャップたちにからかわれたのも今となつちや、良い思い出か。

他にも色々あつたな。京もいじめられていて、みんなで苛めたやらをリンチにしたり。みんなで夏祭りに遊びに行つたり、みんなで町内『子供喉自慢大会』に参加したり、楽しかつたことが沢山あつたな。殆どがファミリー絡みだけだ。

小雪「ムグムグ……ん? どうしたの城? セツカから遠い田をして

俺が作った朝食を食べながら、ユキが聞いてきた。小雪が住んでいれる家はここから、數十分ほど歩いた距離の一条家より、ちょっと小さい一軒家だ。それなのになぜ朝食と一緒に食べているのかつて? 基本、ユキが俺んちの合鍵を使って、俺を起こしにくる時間は、朝のHRが始まる時間の2時間前なのだ。そんな朝早くにユキが飯を食べる事も、作る事もなく(てか、ユキに作らせたらダメ絶対)俺を作らせ、一緒に食べる……これが学校がある日の日常だ。

城「ちょっと過去のこと思い出していたんだ」

小雪「あ、わかつた。読者のみんなに説明を「危険なメタ発言はすんな!」」「つえーい」

な、なんてことを言つんだ……今までずっと一緒にいたが、ユキの性格は未だに掴めない……というか、行動が読めない。親父みた

いに突拍子すぎるのだ。

その本人は「城君！海外が……一攫千金の匂いが僕を呼んでいる！だから今日から1人暮らしをしてくれ！！」と中学2年のころにそんな、電話一本で両親2人は海外へと飛びだつたのだ。……ユキに合鍵を渡して。一応仕送りは送つてきているのだが、如何せん、食費は俺の分だけなので小雪の分は含まれていないため、金が足りない。時々俺は川神院でバイトをしているんだけどな。門下生の相手と、ワン子とモモ先輩の相手をするという。ハードな内容だが、時給もかなり高いので俺としてもありがたいのだ。月に3回やるだけで、2週間分の生活費が確保できるしな。

城「ほら、口元にケチャップが付いているぞ」

小雪「ん～～？どこ～～？」

城「舌で拭き取ろうとするな。ペちゃんかお前は」

テーブルに置いてある布巾で口元を拭いてやる。体つきは子供の頃には想像できないくらいに成長したが（どこがとは言わない）精神はまだ幼いところがあるんだよな。

城「ほら、取れたぞ」

小雪「さあきゅー」

お礼を言つて、食べるのを再会する。

城「つて、また付いてるじゃねえか！」

小雪「とつて～～」

城「自分で拭きなさい。」

城「じゃー、行くか

小雪「うん

皿を小雪と一緒に洗つて、川神学園……俺たちが通っている学園へ
に行く準備をして、小雪と一緒に玄関を出る。

城「いってきます」

小雪「まーす

誰もいない家だが、あいつはちゃんとする。「れも習慣付いたせ
いだらうな。意識しなくても無意識に口が動く。

小雪「あ、ちよつちよ~

城「じーじー、じーじー行くもつだ

皿を舞つてこむモンシロチョウを追いかけようとする小雪を引き止

める。

小雪「あ、犬だ」「

城「うううう、なにをしようとしているんだ」

近寄ってきた野良犬に、油性ペンを鞄から取り出し落書きしようとしたユキを窺める。通学途中にはユキがあっちへふらふら。こっちへふらふらと迷うから、つい田を離してしまつとどつかへ消えてしまうので、注意が必要なんだよな。ま、基本視界に入つていれば問題ないが。

小雪「犬の額に肉つて書」うかなかつて

城「やめんか！！」

見ろ、今の俺たちのやり取りに犬が低く唸つて威嚇してんじゃねーか。

小雪「がう――――

犬の真似をして、両者睨みあつ。……本当にににをやつてるんだか。

城「置いてくぞ――――

小雪「あ、まつてよ――――」

俺が置いていくとするとい、今まで興味を持っていたものに、興味を失つて追いかけてくる。

城「まったく、道草を食つなら放課後にしておけっての

ぴょいんと隣に並んだコキジトコパンをへらわす。

小雪「あつ。ぱーりょくはんたーー！」

額を押さえて、俺をジト目で見てくる。

こんなやつ取りをしながら、俺たちはある川原までやつてきた。

これといって形容詞が見つからない男「あ、来たみたいだね」「何年経つても、永遠の脇役である師岡卓也が草むらを横切ってきた俺たちに、気づいたみたいだ。

小雪「おつせよーモローー」

城「おはよ。今日もモロは影が薄いな

卓也「人の顔を見るなり、傷つくことを言わないでよー」

小雪「みんなもおはよー」

城「おはよう。今日からまたかつたるい学校生活が始まるな

他の集団にも挨拶を。その相手とは

卓也「また無視！？」

青髪の女の子「おはよつ2人共。大和付き合つて」

モヤシ風な男の子「おはよう、小雪、城。お友達で」

「ゴリラ」「ねむ、おはよーさん。今日の俺様は一段と決まつていなか?」

挨拶の中に告白を交えてるのは椎名京。昔と比べれば自身を曝け出すようになった。

……ファミリーのメンバーにだけ。

その告白を受けて断つたのは直江大和。悪知恵が働く我らが誇る軍師様だ。小学校の頃に、京がいちめられていたのを大和が率先して助けたら……惚れられた。ということだ。

ポージングをして、鍛えに鍛えまくった胸板を見せ付けてくる、人間の進化前のゴリラは、島津 岳人。その巨漢の体から繰り出されるタックルをくらつたものは、ひとたまりも無いくらいの大男だ。
知能もゴリラ並つまりバカである。

小雪「京また振られちやつたね~。マシュマロ食べる~?」

京「あれは大和の照れ隠しなんだよ。ひとつ貰うねゴキ(パッパッ)」

「

大和「照れても、隠してもいいっての(うげ……マシュマロの色が雪山から火山に変色した……)」

高校生になつてもユキのマシュマロ好きは健在だ。なんて言つ俺もユキの影響で結構好きなんだが。

京は常に携帯している七味唐辛子をマシュマロにかけて食べていた(これを京力スタンムと言づ。ここにテストに出るぞー。……出ないけ

ど）辛党なんてレベルじゃないよなあ。

岳人「それで、どうだ城、ユキ。今日の俺様は？（キラーン）」

さつきから岳人がポーリングしまくつて、『ひざい』。『コリラ』が歯を光らせてもきもいだけだっての。

小雪「ふつー」

城「そうだな……例えるなら、二ノ口動で登場してくる兄貴みたいに決まっていると、城さんは思いますぜ？」

小雪はマシユマロを食べながら適当に答え、俺も適当な出任せを言う。

岳人「へ、ありがとよ。城」

卓也「つまりそれは暑苦しい男つてことなんじや……」

モロは突っ込み役なので、俺の真意がわかつたみたいだが。岳人はバカなので満足気だった。

6人で世間話や趣味の話をして歩き始める。

俺たちは基本川原で合流して、川神学園へと向かう。いつもならあと3人いるはずなのだが、一人は放浪癖があり、昨日から埼玉に遊びに行つた。もう2人は朝から修行をしているんだと思う。変態橋に着いたから、そろそろ合流するんだとは思うんだけどな。ちなみに変態橋は名前ではない。本当は多馬大橋と言うんだが、この橋には

猿のような男「なあなあ、見ろよ」の写真集に載つてゐる女の子。ま
じかわいくね? やべえ、勃つてきやがつた!」

太つたキモヲタ「はあはあ……あ、アミたんか。か、かわいいんだ
なー。オイラの嫁なんだなー」

工口本を堂々と歩きながら読んでいる男どもや

イヤホンを片耳につけた女の子「…………9回裏…………満塁のサヨナラ
の場面でバッターは村田。最低でも同点には…………！」

浴衣を着た女子「ほほほほ。庶民はいつ見ても貧相じやのぉ

奇抜な生徒たちが次々と登校するからだ。

犬みたいな女の子「みんな…………おはよ…………」

女王のオーラを醸し出している女性「よーしワン子。どっちがあい
つらの元へ先につけるか競争だ」

みんなで一斉に声の発信源の方へ振り向くと、砂煙を出しながら女
2人がこっちへ走つて来ていた。

ビビビビビビビビ!

キキー――――――――――――――――――――――――――――――――

女王のオーラを醸し出している女性「はははは。私の勝ちだなー」

犬みたいな女の子「ううう……お姉さま……早い！」

物凄いスピードで特攻してきた2人は余裕で俺たちを通り越し、ブレークをかけて、息を乱さずに立っていた。

胴衣姿で。

大和「おはよう。ワン子、姉さん。それよりも人の迷惑つてこと知つてる?」

一子「え、なにが?」

百代「迷惑?なんだそれ食えるのか?」

大和の言つている事が理解していない、犬っこらは川神一子。猪突猛進な性格で、風間ファミリーの切り込み隊長。孤児院で育つていたことがあり旧姓は岡本だったのだが、色々あつて川神家に引き取られ川神一子となつた。名前と犬みたいなやつなので、みんなからはワン子と呼ばれている。運動面に関しては言う事はないんだが、勉強面では岳人と同じくらにバカなんだよなあ。

悪気100パーセントで返しているのは川神百代。俺たちより1つ年上の先輩でワン子の姉的存在。唯我独尊、天下無双の言葉が良く似合う人で、その強さはまさに黙。俺と戦つて勝つたことはないが、川神市。県外にもモモ先輩の名前は最強として知れ渡つている。俺?あんまり戦わないからそれほど知れ渡つてはいない。
……モモ先輩よりはね。

城「はよー。朝から元気だな」

一子「もちろんよー。アタシから元気を取つたらなにが残るつていう

のよ

城＆大和＆卓也＆岳人＆京「「「「バカだけだな（だね）」「」「」

男性陣の声が揃う。

一子「ひどっ！－ていうか、岳人には言われたくないわよ！」

どっちもバカだと思うが。

岳人「なんだと？俺のどこがバカだつていうんだ」

城「存在 자체がじやね？」

岳人「なんでお前が答えるんだよ！－つーか存在まで否定すんのかよ！－」

百代「あー、朝からうるさいぞ。岳人」

モモ先輩の手加減ないボディーブローが岳人の腹にめり込む。

岳人「な……なんで俺がこんなめに……」

膝から崩れ落ちる。

百代「今日は対戦相手がいなくて、むしゃくしゃしていたんだ

ただのハツ当たりだった。

京「ふーん。珍しいね」

小雪「そんなどきせマシユマロを食べよ～～」

ユキがワンナビモモ先輩にマシユマロを配る。

一子「ありがとユキ。でも甘いものより、肉が食べたいわ――」

百代「これはこれで美味しいんだけどな……大和～放課後になんか奢つてくれ～」

文句は言いつつも食べるのかよ。モモ先輩は大和に集めつゝ、首筋に抱きつく。

大和「ちょっ、姉さん！恥ずかしいからやめてよ……」

おーい、鼻の下が伸びてんぞー。

京「わ、私の大和が……知らない女に誘惑されてる……」

卓也「私のつて、まだ付き合つていないじゃん！それに、モモ先輩は思いつきり知り合いでしょ！」

京「ナイス突っ込み」

城「さすがモロ。見事な一連続ツツコミだな」

京は片手にプラカードを持ち、10点満点を出す。俺は座布団を一枚差し出す。

卓也「嬉しくないんだけど……それに2人共どこから出したのや…

…

それは秘密。

小雪「それよりも、早く学校に行こうよー。置いていくよー」

ユキがくるくると回りながら、みんなより先に進んでいく。なんか、朝から妙に機嫌が良いな?

大和「ユキのやつ、嬉しいそうだな」

岳人「いてて……だな。あの変人クラスとおさらばできるのが嬉しいんじゃね?」

百代「私は違うと思うがな。ユキはそれなりにSクラスでは楽しくやっていただろ」

京「やつぱり、城と同じクラスになれたのが嬉しいんだと思うよ」

モロ「毎日昼休みに、僕たちのところに遊びに来ていたもんね」

一子「???.びつこいつ」とかしら?」

好き勝手に言つてくれてるね。ワン子は除外するが。

去年……一年生の頃はモモ先輩とユキ以外はみんなFクラスだった。モモ先輩は一年上なので当たり前だが、ユキは成績優秀者なのでSクラス所属だったのだ。考えられる理由としては入学試験の時にユキは上位入賞者に入るほどの点数を取つただからと思う（俺と京はそのことを噂で聞いた事があるので、適当に手を抜いた）。

一年生以降からなら、定期試験で50以下の人にはSクラスから切り

落とされるのだが、一年生にはそのシステムは採用されてないのだ。そのせいでユキはSクラスに残る事しかできず、自分だけみんなとは違うクラスだなんて一ざるいよ……なんてことを言つて、ほぼ毎日俺に不満をぶつけまくつていた。

で、二年生に上がった今は一年の最後の期末テストでユキは適当な点数を取つたので、Sクラスから落ちて他のクラスになることになつたのだが……これも運命なのか、自宅にクラス編成の表が届き、俺たちはみんなFクラスの欄に載つていたのだ。

学園長が仕組んだ氣がするのは俺だけなのだろうか……

城「まあ、ユキが嬉しけりやなんでもいいか……」

京「それは兄代わりとしての気持ち?」

小さく呟いたのだが、近くにいた京には聞こえたようだ。
真剣な目で聞いてくるのが、妙に気になる。

城「? そうだが」

俺は何気なく答えただけなんだが……

京「……ユキ。相手は大和と同じくらい手強いよ……」

京は遠くにいるユキに同情の視線を送つていた。
……わけがわからん。まじ、わからん。

始業式も終わり、授業も無いのですぐに帰宅の時間になりました。
カットしすぎだつて？なこと言つても特に見せるほどの内容じゃなかつたからな。だつて、クラスメイトはユキ以外はみんな一緒に顔見知りだし、担任の先生は……小島 梅子先生と言つて、美人で、鞭を持ち歩いている。しかも、遅刻していた生徒には鞭でを振るつて、体罰ありの軍隊みたいな人だ。

他には……あ、始業式なのに学園長が不在だつたつてことだ。
……どうでもいいな。

帰りのHRが終わつて、みんなの今日の予定を聞いてみたら、大和は校内の人と親交を深めるためにカラオケに行くらしい。岳人はジムに。モロは新作のゲームを買いに、ゲーブルズに。京は参考書を買いに本屋に。一子は俺が教えた必殺技を習得するために修行。モモ先輩は他学年の女の子をはべらかして、喫茶店でお茶すると言つていた。俺とユキは特になにもないので、すぐに帰宅する事にして、俺んちでユキとのんびり過ごすこととした。

城「靴掃いたかー？」

小雪「うん」

下駄箱でローファーに履き替え、鞄を右肩に担いでユキと一緒に校内を出る。

小雪「ねー、城」

城「どうした？」

小雪「かゆみせこ 貂蝉って、実はマッヂョだつたんだね～」

城「……本当にどうした？」

なんで、貂蝉=マッヂョに結びつくんだ？ 貂蝉といえば古代中国四大美女の一人じゃなかつたけ？ つーかどうして唐突に貂蝉なんて名前が出てくるんだよ。

小雪「HRが終わつたあとにね、モロが「真恋 無双に出てくる貂蝉は、岳人そつくりだよね」って言つてたから」

顔の影を強くして、モロの声真似をするユキ。

……モロに対するイメージつて、幽霊なのか？ 岳人がガチムチゴリラだつてことは、ユキも思つていたんだな。……まあ、ユキはこうみえてもかなり毒舌だからな。岳人本人に向かつて「ドンキ～～餌の時間だよ～～～」なんて言つて、バナナを目の前でプラプラとさせて挑発しているしな（怒つた岳人はユキを追いかけ回したが、ユキはワン子と同じくらい身体能力が高いので、からかいながらも逃げていた）

城「いいか、ユキ。モロが言つてることの大半は、あいつの妄想なんだ。だから、あんまり真に受けるなよ？」

立ち止まって、俺はユキの右肩に手を置いて、諭す。

嘘は言つていない……よつつな気がする。

小雪「うん、わかつたー。これからはモロの言つ事は信じないことにするー」

首を傾げ笑顔で、俺の言葉を鵜呑みにした。

モロになんて言えばいいんだろ……まあいいか。だるいし。

城「……ん？」

校門の辺りから、俺とユキを見るやつらがいるな。俺の視力にかかれれば望遠鏡じゃなきゃ、見えなことハリマドも俺には見えるんだぜ！

……お、あいつらは……。

城「ユキ。あの2人はお前の知り合いじゃないか？」

小雪「ん？……あつートーマに準だーーやつほーーーー！」

手をふんぶんと振つて、ここにいることをアピールするユキ。校門の2人は、1人は笑顔を崩さずに、もう1人は呆れながら俺たちのところに向かつってきた。

眼鏡をかけた美形の男「」んにちはユキ。久しづりですね

ハゲ「今日から別々のクラスだもんなあ。元気にしてたか？」

小雪「もつちるんー元気はつらつーーーーー！」

おいユキ。右手に持つていてるリポ タンはどうから出した。手を後ろに回したらと思つたら、いきなりビンを持っているんだもんな……

ハゲ「元気があるのはわかつたから、そのリポビタンはしまいなさい！メーカーさんに訴えられるぞ！」

小雪「飲んでからー」

お、モロにも負けないくらいの突っ込みだ。こいつも地味キャラか?

ハゲ「なああんた。今失礼なことを思つてなかつたか?」

城「氣のせいだ」

ハゲの癖に勘がいいな。いや、ハゲだからか? 悟りでも開いているのか、人の心が読めるとか……

眼鏡をかけた美形の男「」いつやつて、立会わせて話すのは初めてですね。一条城君」

ハゲ「俺は時々Fクラスに行つてたから、知つてると思うが。会話はしたことないけどな」

俺から見て、左から順にユキ、イケメン、ハゲ。の並びで俺に話しかけてきた。ユキはリビタンを飲んでいる。

城「だな。ユキから2人のことは良く聞いているぜ。眼鏡のアンタは、葵冬馬。エレガンテ・クアットロの一人で。女にモテモテで、Bしだとな。そしてそつちのハゲは、井上準。ハゲでロリコンでハゲで、犯罪者予備軍でハゲでハゲだとな」

ハゲ「ハゲつて何回言つてるんだよ!他に思いつくことがないのかよ!?」

のプレイボーイ（バイでもある）川神市で一番規模の大きい病院：『葵紋病院』の跡取り息子だったのだが、二月前に不正が発覚し、自身の父親、院長が逮捕され。今でも色々といやじがあるとか。

こつちのハゲで突つ込み上手のハゲは井上準。同じくS組み所属。葵とは小さい頃からの親友で、親の繋がりもある。つまり、井上の両親も地位が高くて不正に関わっていたことで、逮捕された。今じやどつかのマンションで2人で暮らしてるとか。こいつの肩書きは『神なるロリコン』として有名。一年の時に俺たちのクラス……F組みにロリ委員長がいるので、ユキと一緒に何度も拌みに来ていた。いつ逮捕されてもおかしくないと俺は思う。昼休みには校内放送の、モモ先輩のパーソナリティを務めてもいる。万能型のハゲである。ちなみにエレガント・クアットロとは、川神学園に在籍しているイケメン4人のことである。その1人に葵。風間ファミリーのリーダー、風間翔一。俺のクラスメイトで友人の（相手は友達と思つてないかもしけんが）源忠勝（みなもとただがつ）通称ゲンさん。あと1人は……多分3年の先輩だったはず。

葵「私のことを城さんに知つていただけているのは、光榮です。ユキからは毎日あなたのことを聞かされていましたから」

城「なんて言つてた？」

ハゲ「ぼくと会つてから『だるい』と言つた回数が10万回を越した、急け者だと。不幸の神様に取り付かれているくらいの、凄い不運の持ち主だと」

城「悪いことを言つ口はこの口か？」

リポタンを飲み終えて、マシュマロの入った菓子製品の袋を片手

「、マシコマロを食べてこむコキの類を両手で引っ張る。

小雪「い、いひやこよ~~~~~」

涙田で俺に抗議の声を上げるコキ。まつべの感触がマシコマロみたいで面白ご。毎日マシコマロを食つてゐからか?

葵「…………でも、とても優しくて頬にになら。最後には決まって叫んでますよ

葵が俺の耳元で囁いてくる。

思わず、両手を離してしまつ。

小雪「ううー…………ほつぺがいたいよ~

俺に引っ張られた頬をさする。

小雪「…………城?なんか顔が真つ赤だよ?」

城「はつー?べ、別に嬉しくもなんともないんだからね…………」

ユキがそんなに俺のことを信頼していたこと、照れてしまつたことなんか、ないんだからな!…勘違にするなよ!…!

葵「ねおせ、城さんは初心なんですね

準「シンテレだな

小雪「おー、これがシンテレ

城「ええい、違つてのー」

ツンデレはゲン上で十分だ!!

城「んなことよー!お前らはユキを待っていたのか?校門でなにもしないで、立ちつしてやつの用はそれぐらいしか思いつかないんだが」

話題を強制的に変える。その間に俺は心を落ち着かせる。

葵「用とこつ程ではあつませんよ。ユキと少し話がしたかっただけですか?」

ハゲ「話を逸らしたな……。俺はお前さんと一緒に話してみたかったからな」

ふむ……葵に、ハゲか。俺もこの2人とはもつと話してみたいな。ユキが積極的に友人を作ることは少ないからな。

小雪「城ー。おなかすいたー」

俺の袖をぐいぐいと引っ張つて、駄々をこねるユキ。携帯のディスプレイで時間を確認すると、もうすぐ昼飯には良い時間だ。

城「わかつた、わかつた。俺が家でなんか作つてやるから、そのマシマロで我慢しつけ」

小雪「うえーー」

もぐもぐとマシマロを食べるユキ。俺が口を開くと、中で一つま

うり込んでくれた。

葵「仲がよろしいのですね」

城「付き合い長いからな。……そだ、お前らこの後暇か?」

ハゲ「俺は暇だが……若は?」

葵「私も今日は特に予定はありませんが……」

2人ともフリーみたいだな。ユキに日配せをすると、俺の意図が伝わったのか、こつくりと頷いた。

城「なら、俺の家で飯を食つてかないか?」

ハゲ「……いいのか?」

小雪「遠慮なんてするなよー。ハゲの癖に。城の作る『はんはおい』いんだぞー!」

ユキはハゲの後ろに回つこんで、その輝かしい頭部をペシペシと叩く。

ハゲ「ハゲは関係ないでしょ。それに人の頭は叩かない」

小雪「うーん、どつかに撥ほないかな

ハゲ「そんなものは探さない!」

辺りを見回すユキに、ハゲが止める。立ち位置がモロだなやつば。

葵「……よろしいのですか？」

少し影が差した表情で、んなことを言つてきた。

城「ああ。金なんて取らないから安心しろよ？」

片田をつむり、ウインクする。

ハゲ「知り合つて間もないのに、他所様を家に上げていののか？」

城「お前らはユキの友達なんだろ？ ユキが選んだやつなら、根は良いやつだろしな。……言つとくが、親のことは気にすんなよ？ そんなことで俺は友人は選ばないしな」

葵&ハゲ「……」「

驚きの表情を浮かべる。葵は少しわかりづらいが、動搖しているようにも見える。

ユキ「そうだー。気にすんなー」

いつもの調子でユキも俺の言葉に同調する。

ハゲ「……ユキが懐くのもわかる気がするな」

葵「そうですね……城さん。よろしければ私達と友人になつてくれませんか？」

これまたSクラスの人とは思えない発言だな。

城「ふつ……俺は家に他人なんかは呼ばないぞ?」

葵「……一本取られましたね。これからよろしくお願ひします。城君」

ハゲ「よろしく頼むぜ。城」

2人から手を差し出され、握手を求められる。

城「ああ。よろしくな。冬馬、ハゲ」

右手は冬馬の右手を、左手は準の左手を握った（左手の握手は悪い意味の方だが、今回ばかりはしゃーないだろ）

小雪「ぼくも、ぼくもー」

ユキが下から俺の前に、元やつと飛び出てきて握手している手に、自分の手を載せる。

冬馬「（城君ですか……とても興味深い人ですね）」

準「なんで若是名前で、俺はハゲなんだよ……」

城「それはお前がハゲだからだ」

小雪「ハゲだからだー」

準「そのまんまじやねえか！」

「うじて、俺たちは友達になった。

城「んじゃ、適当にユキと寛いでいてくれ」

リビングに鞄を放り投げて、台所に立つ。

準「と言われてもな……料理を作つてもうつておいて、それは悪い
気が

「

冬馬「ユキ、これはなんという木なんですか?」

小雪「観葉植物だつてさー。少しでも運氣を上げるために、城が
言つてたよ

準「ユキはともかく、若は遠慮がないな……」

城「手伝つてもらひ時は俺が呼ぶから、それまではユキと遊んでや
つておいてくれ」

冷蔵庫の中を漁りながら、リビングでなにかやつているであらう
人に声を投げかける。さて、なにを作ろつか……。あるのは、たま
ねぎ、にんじん、じゃがいも、豆腐、魚……カレールーもあること

だし、カレーにするか。お手軽、美味しい、早い。の3拍子揃った料理だからな。

城「始めるとしますか」

腕を巻くつて、俺は3人のために美味しいものを食わせようと、気合をいれた。

小雪「トーマー、準一、これであそぼー」

準「ん？それは……トランプか？」

小雪「そだよー。城お手製のトランプ」

冬馬「へえ……面白そうですね」

準「あいつが作ったトランプか……持っているだけで不幸になりそうだな」

俺に聞こえないとでも思つたら大間違いだぞ。ハゲめ……てめえのカレーには生肉ぶち込むぞ？

小雪「最初は婆抜きやろー」

冬馬「いいですよ

準「俺もいいぞ」

小雪「それじゃあ、ぼくが切るね。シャツフル、シャツフルー」

シユバババババ ポロッ（切つてる時に一枚だけ飛び、床に表側で落ちる）

小雪「あ、失敗しちゃった」

準「手作りつつたって、なにがオリジナルなのかわからなん？」この絵柄のやつは確か……」

冬馬「F組の方ですね。この女性は川神一子さんだったはず」

小雪「そだよ。Hース（1）だからワン子。数字の番号によつて、みんな絵柄が違うんだよ～」

準「何気にクオリティが高いな。どうやって作つたんだ？」

城「あー、それはな、パソコンでみんなを書いたのは俺だが、カードは知り合いの業者に作つてもらつた」

玉ねぎを切る手は休まずに、準の疑問に若干大きめの声で答える。
二次元風に書いてみたんだよな。涼宮ハヒで例えるなら、ハルちゃん。灼眼のシナだと、シャ坦ん
風に。

それにしても……涙が……。たしかたまねぎにはアリルプロピオン
つつー成分が含まれているせいでの、鼻や目を刺激して涙ができるんだ
よな……そんな成分いらぬいつての。ポケンのモンターボール
の親戚のプレアボールと同じくらいいらぬよ。あれ、2000
円でモスター・ボールと性能変わらないじゃん。

冬馬「ユキ、ちよつとトランプを見てくれませんか？」

小雪「ほいっ」

準「うーむ……愛しのエクラスの委員長はないのだうか？」

いねえよ。」のロココン野郎が。ポリスマンに突き出すぞ？

小雪「いないよ。」のトランプは風間ファミリーのみんながベースだもん」

冬馬「それだと、余ってしまいませんか？ ファミリーの人数は9人だつたはず。ジョーカーを合わせても4枚はあるはずですが」

小雪「うう。今は3枚だよ。忠勝が入っているからね」

準「忠勝……お、ここにうのことか」

小雪「友達だからね。特別に城が作ってあげたんだよ」

冬馬「…… そうなんですか。…… あの城で、みなまで言ひつな。ちゃんと2人の分は作ろうと考えていたからな」…… ありがとうございます。とても嬉しいです」

準「自分が絵柄になつたトランプか。噂には聞いていたんだが、本当になんでもできるんだな…… しかも、マーク」とにポーズまで違うのか」

ジョーカーの人意外は4つ格好やポーズが違つ。8のユキはスペードだと、ブルマを着て回し蹴りを放つているユキ。ハートは私服姿

で座つて、マシユマロを食べている。クローバーでは趣味の紙芝居をカメラ用線で読んでいる。ダイヤは学生服で机に突っ伏して寝ている。

とまあ、こんな感じにスペードはその人の戦闘スタイルを主に。ハートでは日常生活。クローバーは趣味。ダイヤは学生生活の様子をモチーフにして俺は考へている。本人たちに見せたときに、嬉しそうにしてるやつもいれば、いやもんをつけてくるやつもいる（主にモモ先輩と岳人）

小雪「それじゃあ、ババ抜きやう。配るのは一番髪の毛が薄い人だからね～」

冬馬「では、準。お願ひしますよ」

準「どんな決め方だよ……まあ、別にいいが」

5分後

小雪「よーしつ、揃つた！～」

準「ん、なにがだ？手札は五枚だから上がる事はできないぞ」

小雪「みてみてー、フルハウス～」

冬馬「3のスリーカードに4のジョーカー。凄いですねユキ。私なんて、ワンペアですから私の負けですね」

小雪「勝利～」

「いやいや、おかしいだろ！これババ抜きだからね！？同じ数字のカードはちゃんと捨てて置けよー！」

一時間後

冬馬「8でやぎつて、Qで上がりです。また私が大富豪ですね」

小雪「トーマの出したカードは墓地に送られるから、ぼくはヒードジョーカーのキャップを召喚！」

小雪「またほくのターンだね。岳人を3人しようかん（岳人の数
字は？）」

準「ぱ」：パス

小雪「Kの城で準にダイレクトアタックー」

小雪「これで準は26連敗」

冬馬「ババ抜き、フ並べ、ポーカー、真剣衰弱、大富豪。運に左右されるゲームにも関わらず準の勝率は〇パーセント。これはこれで凄いですね」

準「まさか……城の家に住み着いている不幸の神が、俺にもとつつかれたのかー？」

城「アホなこと言つてんじゃねーよハゲ

後ろから、準の象徴であるツルピカスキンヘッドにおたまで軽く叩く。

俺の不運は生まれつき……恐らくあのヲタ神が面田がつて、不幸体質にしたに違いない。前世ではそこまで不幸な田にはあつてないからな。

冬馬「先程から良い香りがここまで漂つてきているのですが……完成したのですか？」

城「ああ。俺特製のカレーだ」

小雪「やつほーい。城のスペシャルカレーだ」

ぴょんぴょんと嬉しそうに跳ねまくるコキ。

食べる前だというのに、嬉しいことを言つてくれるじゃないか。

城「つーわけで、食いたいやつは皿を出してくれ

準「あててて……髪の毛がないんだから、軽くでもおたまなんかで叩かないでくれ。もしもタンコブができたら、委員長に顔向けができなくなるじゃないか」

城「顔を原形が留めてないくらいに殴つてやるつか？」

おたまを準の顎に突き付け、笑顔で威圧した。

準「城……俺はこの闘いが終わったら……委員長を愛でに行くんだ」

城「勝手に行つてろ」

ハゲの額におたまの取つ手の部分を前にし、投げ刺した。

城以外「「「 いただきます」」

城「呑し上がつてくれ

ちゃんと手を合わせる。かの偉人『小野小町』は言いました「食事のマナーを守れないやつに、飯を食う資格はない！」と。

準「言つてねーよ。小町のキャラじゃないだろ」

城「さすがは僧を目指していることだけはあるな……俺の思考を読むとは」

井上準……恐ろしい奴！！

準「田舎してねーよ……お前が声に出してただけだっての……」

む……気づかなかつた。これからは注意して話をないこと。

冬馬「そんなことよりも準。あなたも早く食べたらどうですか?」このカレー、一流シェフが作るカレーよりも美味しいですよ」

穏やかな表情で、準に告げる。

大げさな表現ではあるが、作った身としては最高の褒め言葉だ。味付けはいつも通りにしてみたんだが、冬馬には好評のようだ。

準「それもそうだな……ではまず一口……ング

スプーンですくい、口の中に運んで粗鑿する。

準「にんじんは甘くやわらかく、じゃかいもはほりくろと形を留め、トロトロに煮込まれたまねぎが肉のジューシーさをこいつに引き立てている……」

お前はどうじの料理評論家かよ。でも小説間違つてんだる。美味しいんばの世界に行つたらどうだ?

準「んだが

「

ん? 準のやつがスプーンを皿の上に置いて、ふるふると震えてるや。

準「なんで俺のだけ『ハヤシライス』なんだよ……」

他のと赤いルーのそれを指しながら、俺に文句を囁つてきた。
うわっ、唾が飛んできたーきたないなあ……

城「なにか不服でも？」

準「そういうわけではないんだが……お前たちがカレーでなんで俺1人だけハヤシライスなんだよ」

冬馬「味がよろしくないのですか？」

準「むしろ美味しいんだが…………」

城「ならいいじゃん」

準「作ったお前が言うなよ……！」

なんて目を見開いて突っ込みながらも「確かに美味しいからいいが……」とひとりでに納得して食べるのを再開した。美味けりやなんでも良いんだよ。覚えとけ。

小雪「城、おかわり～」

城「はやつー俺なんてまだ手すりつけてないぞ！」

さつきから珍しく黙つていると思つてたら、食いつことに集中していたのか。

小雪「だって、城のカレーおいしいから」

キンキンとスプーンで皿の角を叩きまくつり、早くじゅうと確定する。

城「はいはい……」

席を立ち、小雪の目を運んでいく。

俺と小雪は珍しい客人たちと昼飯を食つて、ゲームをしたり、カードゲームをしたりして、楽しい時を過いした。

冬馬「今日は誘つてくれて、びつもあつがどりいざこました。とても楽しかったです」

準「昼飯だけじゃなくて、夕食までも」駆走になつちまつたな。ホント助かっただぜ」

8時を過ぎ、太陽が完全に沈んだので。自宅に帰る冬馬と準を、俺とコキは玄関の外まで見送りに来ている。

城「食事について困つたことがあれば、うかで来いよ。その時はまた俺が作つてやるからな……金を払えばな」

準「金を取るのかよ!？」

世の中はギブアンドテイクなんだぜ?世知辛いよねえ……

小雪「また遊びに来てねー」

城「なんでユキが言うのかわからんが……暇な時はさつき教えた連絡先に、電話なりメールなり好きにしてくれ」

遊んでいる最中に俺は冬馬と準とアドレス交換をした（ユキは登録済み）。2人のメアド……冬馬は初期状態のなんだが……準のは

roni-roni-hurricane@以下機種別アド。

趣味丸出しの最悪なアドレスだった。こいついつか犯罪を起しそうで危ないんだが……そんな時になつたら冬馬が止めるだろ?……
……多分。

冬馬「やつをさせていただきます。デートのお誘いの時には電話で伝えますから」

城「それはユキとか?」

冬馬「城君ですよ」

城「お友達でならしいぞ」

冬馬「連れないです」

目を閉じて、落胆してゐるのか肩を落とす。

ふつ、常日頃から、大和と京のやり取りを見てる俺は断り文句を習得したからな。

つーか、本当にバイなのかな?……そういう嗜好のやつっていうんだな……。

准「ま、名残は残らないがそろそろお暇をもつていいとする。明日は野暮用があるからな」

小雪「寺に出来しにいくの?」

準「しません……いい加減に俺を坊さん扱いするのはやめろー単にSクラス内でのことだよ!」

城「ふーん……優等生も大変だな」

小雪「がんばれ~」

準「ユキも前まではSクラスの一員だったんだがな……ついわけで俺と若是明日の準備があるから、そろそろ帰るわ。またな城、ユキ」

冬馬「それでは城君、ユキ。週末明けにまた会いましょう

2人が背を向けて歩き出す。

城「またなー」

小雪「ばいばーい

俺とユキは門から、2人の姿が見えなくなるまで手を振っていた。

城「それで……ユキは何時頃帰るんだ？おじいさんたちが心配しているんじゃないのか？」

2人で皿洗いをしている時に何気なくユキに聞いてみた。

小雪「大丈夫だよー。今日は城の家に泊まるって言つてあるから

城「そうか。なら問題ないな

小雪「うん」

スポンジで泡を立てまくしながら、俺に返事をするユキ。

は？

城「え、泊まるって……どーこ？

小雪「だから、城の家だよー」

城「着替えとかは？」

小雪「鞄の中に入ってるよー」

用意周到すぎる……

城「……俺にきよひく「なによー」ですよね~」

いくら幼馴染だとはいえ、若い男女が一つ屋根の下で泊まるることは色々とヤバイ気が……いや……

小雪「ゴシゴシ～キノコ雲～」

チラリとユキの様子を窺つてみると、泡で遊びながら上機嫌で皿を磨いているユキ。

……まあ、ユキ相手に俺が発情するわけもないし、学園側やファミリーたちにばれたら、黙らせりゃいいだけだしな

プロローグ～学生編～（後書き）

この小説のメインヒロインとしてはユキですね。
後は2、3人ほどサブヒロインを出そうと思っています（1人はもう決まります）

お泊りと爆弾カレー

？？？『シンジ……急いでこんな所に呼び出して、なんの用だ？俺は忙しいんだが』

シンジ『「めんなアシ。けど……すぐには済むから』

アツシ『だつたら早くしてくれ。こんな夜中に薄暗い桜のえ……シンジへ……な、なに……を』

シンジ『え、えへへへ。アツシが悪いんだよ、だよっずっと僕の思いに答えてくれないアツ』

プリッ

居間で暇つぶしに見ていたドラマがあまりにもつまらんので、リモコンを操作して電源を切る。

冬馬のやつ、「おすすめの番組があるので見てみたらどうですか？」

なんてメールを打ってきたのは良いんだが……

B-L物を進めるなよーーー！

『ドキドキメモリアル』桜の木の下であなたを討つへ』なんてタイトルだったから、気になつた俺がバカだつたよーつまりなすぎるー！途中から見たせいで話しの展開がわからんねーし。登場人物が男ばつかでむき苦しそぎんだよー

このドラマの監督はいったいなにを思つて、作つたんだよ……これが流行ると考へていたら、来世はシャー芯にでも生まれ変わった方

が良い。

城「無駄な時間を過ごしちまった……」

こんなことなら部屋で勉強していたほうがずっと有意義だったぞ。

小雪「城へお風呂空いたよ~」

ふわっとシャンプーの香りをさせ、ユキがパジャマ姿で濡れた頭をタオルでふきふきしながら、入ってくる。

ユキのパジャマは黒を強調としたナイトドレスだ。胸の所にハート型のレースでアクセントの付いた、清楚で可愛らしいドレスだ。ユキのイメージとは反対の色だが、これが結構似合っているのだ。まあ、身内戦闘のフィルターを外して見ても、スタイルの良いユキはなにを着ても大抵は似合つんだがな。

城「特にやることもないし、入ってくるとしますかね……つと、その前にユキの布団を出してこないとな」

ユキが泊まりに来ると、一階に空き部屋があるので（ユキの私物も置いてある）そこで寝る事になつている。

小雪「布団ならいつもの押し入れにあるんでしょ？僕が持つてくるから、城はゆっくりお風呂に浸かっていいよ

城「そか。じゃ、頼むわ」

小雪「アイアイサー」

敬礼をして、ユキは一階に上がつていった。

俺は今日一日の疲れを取らせてもらおつかね。

城「良いお湯だつたな。……ん?」

小雪「す……す……」

居間に戻ると辺りに色鉛筆と画用紙が散乱していて、その囲まれている中にコキが色鉛筆を持ったまま、うつ伏せで寝ていた。遊び疲れたのかもな。朝からやけにテンションが高かつたし、昼真は冬馬と準と一緒に騒ぎまくったし。

壁に張り付いてある時計を見上げると、時刻は0時を過ぎていた。春になつたとはいえ夜はまだ肌寒い。こんなところで寝てしまつては風邪を引くかもしれないし、部屋まで運んでやるか。

城「やれやれ……世話のかかる義妹だ」

色鉛筆はケースにしまい。画用紙は全てまとめた。コキを起しだなによつてゆつくつと仰向けに体勢を変えさせ、首筋に右腕を。両足

の脇に左腕を刷り込ませ、震動を起しそよぐくつと抱え上げた。いわゆるお姫様抱っこでござつた。

俺はコキの部屋（仮）まで運んでベッドに寝かせてやつた。紙芝居の道具をリビングに戻りつと踵を返した時に

小雪「ひひ……ん……じょ……ひ」

俺の左袖のところに引っ張るような力を感じた。振り返つてみるとコキが俺の袖を摘んでいた。

……寝てこるんだよな？

城「……離してくれないと俺は部屋に戻れないんだが……」

声に出してみると、部屋からぬきのコキの寝息だけが静かに聞こえるだけだった。

寝ているのか……。寝ているコキの力なんて、ほとんどないに等しいので簡単に解くことはできるんだが

小雪「こひや……せだ」

なんて不安そうな顔で寝言で言われては、傍にいてやさつとこつらつ持ちが強くなつてしまつ。はあ。一応リビングや他の部屋の電気は消したしな……しゃーないか。

ピシュウッ

パチツ！

近くに落ちていた消しゴムを、ドアの真横にあるスイッチ田掛けて投げつけた。見事に命中し部屋の明かりは消えた。

NICE SHOT!

城「……ではお邪魔します……」

ユキに拘まれたまま俺はゆっくりとベッドに入り、布団を被る。俺とユキの空間を多少開き、ユキの顔を見つめ拘まっている手で頬を慈しみように撫でてやる。

城「おやすみユキ。……良い夢を」

俺は目を瞑り、意識を闇の中へと預けた……

その日はなぜかぐっすりと眠れた。

s.i.d.e.~ 榊原小雪~

小雪「ん……んん?」

ん～～～…………えっと、昨日お風呂を作っていたり歸れなくなつちやつて
…………そのまま寝ちゃつたんだ。でもちやんとベッドの中に入……あれ?

城「ZZZZZZZ」

どうして城が僕と一緒に寝てるんだろ?…もしかして僕をここにまで
運んできてくれたのかな?それとも夢?……ふわあ。まあここや。
まだ眠いしもう一回寝よ。

小雪「おやすみ~」

もぞもぞと布団の中で動きながら城に近寄つて、僕はもう一度夢の
中へ旅立つた。

s.i.d.e.~ 榊原小雪~ out

4月19日(日曜)

城「……朝か」

いつもとは違う感触と匂いに刺激され、俺は目を覚ました。
確か……コキを部屋まで運んで、コキが俺の袖を掴んで……

小雪「す〜」

……なんか俺の胸の中でコキが穏やかな表情で寝ているんだが。
間違えた。この表現は死人に対する扱いか。朝起きだからボケがい
まいちだ。

城「おはよ〜……コキ」

小雪「ん……」

軽く頭を撫でてやると、身動きしなりて俺に身を寄せてくる。

……なんか柔らかく暖かいものが当たっているのは、コキのムロ^ロげ
ふんげふん！－いくらコキだと言つても、もしも万が一、億が一に
なにか間違いがあつてからでは遅い。さつと起きる事にしよう。

城「よつと」

ベッドからゆっくりと出で、天高く体」と腕を伸ばして体の調子を確認する。

今日も異常なし。絶好調だな。だるいが。

城「まず洗面所で顔を洗つて貰りますかね」

ユキが被つている毛布を直してやり、俺は部屋を退出する。朝飯は昨日のカレーにするか。一歩経つと、カレーの味がまろやかになつて美味しくなるしな。

城「カレーに七味唐辛子を10回振り掛けるとか……舌の感覚が痺しないか?」

やたらと遅い朝飯（時間帯は11時前）の準備をしながら、この前ファミリーのメンバーと、カレーになにをトッピングするかの話題で、京が言つていたことを思い返していた。

岳人、ワン子、モモ先輩はカツといった王道派。大和と俺は福神漬けやチーズ等の副産物を入れることが多い。ユキはマシュマロとかあるもの全てを混ぜ合わせたりする、カオスな組み合わせを好む。

モロは地味キヤラリしくなにもかけない派。

京は……キムチやらブラックペッパーやらタバスコやら、辛い調味料をしこたま振り掛ける。辛い物好きの人が挑むことすら躊躇させる超辛党派だ。俺には到底真似できない。

小雪「はよー……

寝惚け目を擦りながら、ユキがてくてくと右手にじうさぎの人形を地面に引きずりながら、起きてきた。

白いうさぎとユキのチョイスはかわいいとは思うんだが……それは人形が普通のだったたらの話である。

この人形の種類は『臓物アニマル』と言つて、動物の腸が飛び出してたり、口から血を吐き出していたり……とても趣味が良いとは思えないくらいの不気味なデザインばかりなのだ。

城「おはよう。朝飯がもつすぐできるから、顔を洗つて身だしなみを整えてきな」

小雪「うん……

覚束ない足取りで洗面所に歩いていった。

……洗面所で溺れてたりするなよ？

小雪「ねー、城」

城「むぐ……ん?なんだ?」

寝巻きのままで、昨日の余つたカレーと焼き魚の朝食を2人で取つていたら、コキが自分のコップに麦茶を注ぎながら話しかけてきた。

小雪「僕をベッドまで運んでくれたのって、城だよね?」

城「そうだが……」

俺以外に誰もいないだろ。親父と母さんは海外生活を満喫してんだし。

小雪「じゃあそ、僕と一緒に寝てた?」

……なんて答えるべきか。正直に言うのもハズイし。かといって、ユキに誤魔化すのもなんだか……良心が痛くなる。

城「なわけあるか。自分の部屋で寝たに決まつてんだろうが」

が、ここは出任せを言つといったほうがいいだろ。コキのことだから、ふとした拍子に喋つちまうかも知れないからな。

ファミリーにばれるのはまだいい。だがクラスの連中や教師陣に知られたりしたらかなり面倒なことになる。後者の方なんかだと良くて停学。悪くて退学の始末になる可能性が高い。

……いや、川神のじいさんが学園長なら大丈夫か。脅迫のネタに使

われそなうだが、多少の「」となり田圃を廻ってくれるだらけ。

小雪「ふーん……やつぱつ夢だったのかあ」「

城「そりだ夢だ」

小雪「だよね。城が僕こえっちな」とするわけないもんね

城「どんな夢みたんだよー?」

ユキにはまだ早い!

……いや、一応ユキもお年頃なんだよな。精神年齢は低いけど。

小雪「……うつむかとねんかな

城「は?」

小さずぞて良く聞こえない。

小雪「なんでもないよ~」

いつもの笑顔で返ってきて、カレーに焼き魚をまわるひとのつける。
……ん?ちょっとユキの顔が赤くなっていないか?そんなに今日は暑くないんだと思つんだが。

小雪「……ひぶちん」

城「はい?」

小雪「なんでもないよ~」

城「あ、こいつ！人のおかずを奪わない！」

取り返そうとするが、それよりも早くコキの口の中に焼き魚が入つてしまつた。

城「ぬが――――ツ――まだ一口も手をつけてないのに……」

小雪「むぐむぐむぐ……ふあれーにほおふえるのなら、ふあふえて
もいいよ？」

城「食いながら喋らない……」

なに言つてゐのかさつぱつわからん！

小雪「(い)くん カレーに載つてゐのなら、食べてもいいよ？」

城「皮しか残つてないんだが？」

小雪「『ラーゲンたつぷり』

城「いらんわ……」

なんてアホなやり取りをしていたら

~~~~~ (天国と地獄)

小雪「電話が鳴つてゐるよ~」

廊下のほうから、天国と地獄のメロディが鳴り響いていた。これは

うちの電話機の着信音だ。これに設定したのはもちろん親父である。

城「つたく……飯を食つてゐる最中だつての元無粋なやつだぜ、まつたく

食べつの中止して席を立つ。

城「言つておくが、俺のカレーに手をつけるんじゃないぞ！」

釘を刺しこなこと俺が通話してゐる間になか悪戯するか、食べつくしちまうからな。

小雪「わかつた」  
……………多分」

城「多分かよ！！」

ぜつて一なにか仕出かす氣だなー。いつなつたら、わざわざ電話に出で用件を終わらせてやる。

城「あーはいはい、今出ますよ!」

煩く鳴り響く電話機に悪態を付き、受話器を手に取る。

受話器の向こうから、大音量の怒声が！

み、耳が頭がくらくらする

ええい誰だ！！鼓膜が破れたらどうしてくれんだ！！治療費払つてくれんのか！？

？？？「やつと出でくれたわね……。携帯に10回以上連絡したのに一度も出でくれないんだもの」

あ……自分の部屋に携帯置いたままだった。昨日ヨキとじで寝ちまってから、一度も部屋に戻ってなかつたからな。  
だが、朝つぱらから」の声は頭に響く……もう少し声のボリュームを下げるやー

城「ええいーやかましいーわいつれと用件と名を名乗れーーー！」

一子「せつかも十分やかましいわよーあたしよー、一子よー！」

城「なんだ大がよ……俺は犬に知り合ひはないんだ。じゃあな

一子「なんだとはなこよーーー、切ろうとしないでよーまだ用は言つてないんだからーーー！」

うろたえる様子が目に浮かぶ。

にしても、勘の良い奴め。俺が受話器を振り下ろすと机の前に止めやがつた。

犬だから直感にでも優れているのかもしれないな。

城「こつちはまだ朝食が済んでいないんだ。早くじゅ

一子「朝食つて……もつお毎前よ？」

城「言いたい」とほそれだけなのか?じゃあな

一子「だ、だから切るつとしないでつてばー！」

城「なら、3秒以内に用件を言え。さもないと通話を遮断し、お前の家に流星が降り注ぎます」

一子「え？え？」

城「3……2」

一子「ちよ……」

城「1……」

一子「しゅ、修行に付き合つてーー。」

あともうちょいだつたのに……、ギリギリで言いやがつた。

城「修行ねえ……バイトつてことか？」

大抵はモモ先輩の相手や門下生の指導ついでに、ワン子に色々とやってあげてる。だから、あんまし個人的に一子に教えることは少ない。

一子「ううん、今回は城が教えてくれた必殺技の成果を見てもういいたいの」

俺たちが川神学園に上がる何年か前。モモ先輩との試合で使った技を一子が見た時に、教えて欲しいとせがまれたので教えてやつたんだが……当然のごとく、最初はまるでだめ（略してマダオ。まるでだめなおんな）だった。

だが、努力家のワン子は口に口に、上達していく。

城「ふむ、最後に見てやつたのが2ヶ月前か……自身はあるのか？」

これまで見てやつた回数は30回以上は越えてるのだが、完全に自分の物にしたのを見たことがない。

一子「もつひろんー今度のあたしはこいつもと違ひさぬ。」

城「それ毎回同じ事言つてゐるだろ」

ビうせ今回も失敗するんだろうな。

一子「あれつ？ そりだつけ」

こいつの脳みそのサイズはいくつなんだよ。チンパンジーよりちがいんじゃね？

一子「でもでもつ、岩を切り裂くまでの段階はいつたんだよー！ だから完全にマスターするものもつすぐよー！」

ちなみに俺が教えている技は『音速派』<sup>ソニックブーム</sup>。

気を手に込め、鋭くなぎ払つことで空氣を切り裂きながら進む衝撃波が生まれる技だ。

俺は気が使えるので楽にできるが、ワン子はあんまし上手く扱えないでの他の遣り方で教えてやつてる。

ワン子の得物は薙刀。基本は同じだが修行の仕方が違う。気をコントロールするトレーニングは、滝打ちや瞑想。主に精神修行をする。しかし、ワン子の場合はただひたすらに高速で薙刀を振りまくる。それだけ。それだけなのだが……習得するまでの道のりは険しく、

長い。

衝撃波を発生するだけでも、4年はかかる」とをワン子せ半分の2年で出来たのは、正直凄いと思った。

「こいつはアホでも努力の天才なのだ。

……」それを勉学に少しでも向けてくれればいいんだがな。

城「……はあ、わかつたよ。だるいが見てやるよ。修行の成果とやらを」

一子「ホント!?

受話器越しなので表情や態度はわからんが、声から察するに犬耳が生えているだろ?」

城「ああ。だけど、色々と準備があるから晒過ぎでもいいか?」

一子「いこよ。あたしはこいつでもOK。準備完全よ!」

城「完全じゃなくて、万全な」

一子「準備万全よ!」

言い直した!

城「あ、そうだ。ユキも連れて行つていいか?」

もしユキが付いていきたいと言つてくる可能性があるから、ワン子の許可をもらつとかないとな。

一子「うんここよ。……ってあれ? ユキがそこそこくるの?」

ぐあ……失言だつたか？

バカの癖に妙などこで鋭いことがあんだよな。

城「んじゃ、午後に川神院に行くわ。じやな」

一子「え、ちょ  
」

ガシャツ

有無を言わざずに強制的に通話を終わらせる。

都合が悪くなつたら、適当に誤魔化す。大和とモモ先輩の教訓です。

小雪「誰からだつたの？」

食い終わつたユキは食卓の上で、割り箸を組み立てて城（俺じやな  
いぞ）みたいのを作りつとしている。

城「ワニ子から。修行に付き合ひつてさ

小雪「行くの？」

目線は目の前の割り箸城のまま聞いてくる。

城「暇だからな。ユキも来るか？」

小雪「城も行くなら、僕も行く〜

そんな理由かい。

まあ、俺がどつか行くときは大抵ユキも付いてくるから今に始まつ

たことじやないか。

一子も犬だが、ユキも負けじと性質が犬に近いよな。

城「そうか。なら行く準備をしどけよ。服装は出来るだけ身軽な格好でな」

小雪「うーい。……よーしつ 東京タワー」

城「すごつ！」

割り箸に色を塗つたら//「チュアにも劣らないほど」の完成度だ。やたらと忠実に細かいところまで再現しきてる……。テレビチンピオンに出演依頼が来てもおかしくないくらいの芸術作品だ。

「……最後には崩す嵌めになるが」

ゴキに聞こえないようにぼやき、半分ほど残っているカレーを食べ  
る。

城  
ん?  
」

なんか体が熱くなつて……つて！

城カラ――ツツツツツ――！」

辛いを通り越して痛いんだけど！！

小雪「おー、城の火炎放射」

口を開けて驚いている暇があつたら水をくれ！

小雪「消火」

バシャー  
ン

口から火を噴いている俺に、バケツ一杯に汲んだ水をユキがぶつ掛けってきた。

小雪「これでよしつ。……城?どうして僕の頭を掴むの?」

城「お前のせいだからどうがああああああああああああああ！」

小雪「おー、僕宙を浮いてる〜〜」

結構力を入れて片手で頭を轟掴みにしているのに、なんでユキは楽しんでいられるんだ？

本当に掘み所かわからなしそうだ。お、我ながら上手い」と言つた

## お泊りと爆弾カレー（後書き）

城はD・C・?よりは急けていません。  
次々話から原作開始予定です

「ナニヤシロマロセラアた、しかし手で抜こにのナリテしまつたー」（前編）

タイトル関係あつません。

今回はかなり短いです。

「サマソロを『アゲた、しかし手で払いのけられてしまった！』

川神院（裏手）

一子「城？どうして口が真っ赤にな

」

城「気にすんな」

一子「で、でヨ「気にすんな」つ、うん」

俺の無表情の迫力に蹴落とされ、ワン子は疑問を懷きながらもその場は引いてくれた。

激辛カレーを食って、あまりの辛さに火を吹きましたなんて言えるか！

小雪「今朝ねー。城が食べたげきかむぐづ」

余計な事を言いつこなつたので、横からユキの口を両手で塞ぐ。  
少し黙つていようか。

一子「？」

今回は、ワン子は田線を上に向けながら顔してるじバレる」とはないか。

城「そういや、あの口口じこさんと田舎先輩は？」

今さらだが、ワン子とユキの格好は学校指定の体操着……つまり半袖シャツにブルマという、他の学校では多数廃止にされているので、

他校生にしてみれば滅多にお田にかかるない希少価値が高い格好である。

無論俺も、岳人ほどではないがムリツトする」とはたまごある。だつて健全な男子ですから。

ワン子「ゆ、百合……」

小雪「ユツ?」

犬耳を生やして真っ赤になつているワン子とユツの花を手に持つて首を傾げているユキ。

だから、いつもどつから出してんだよ。手を後ろにやつたらユツの花を持つているんだもんな……謎だ。

城「その反応……ユキよりワン子のほうが不純だとみた」

一子「そ、そそそそんなことないわよーーー！」

城「んじゃ、どうして耳まで顔を赤くしてんだ? ユキは平然としてるつての?」

一子「あひひひ……」

縮こまるワン子。やつぱりこいつを弄るのはおもろいな。だが、あんましやりすぎてはいけない。泣く寸前程度に弄るのが風間ファミリーの鉄則だ。

小雪「ん~……なんかモモ先輩の匂いがする」

鼻をくんくんと嗅ぎ、辺りを見渡すユキ。

匂いつて……やつぱりユキも犬だ。

城「匂いはわからんが……この辺りから邪悪な気配があることは確かだな」

あの茂みからだな。ユキに視線をロックオンしている気がする。

？？？「邪悪とは失礼だな。純情と言え純情と

シユバツと飛び出して来て、ユキを抱え上げた。

百代「そーら、そーら

小雪「わー。お姫様だっこだー

城「どこが純情なんだよ……」

一子「あ、お姉さま。帰ってきたんだ」

ワン子が私服姿のモモ先輩に抱きつぐ。  
これなんていうハーレム？

百代「ついついさつきな。まったくあのくねじじー、私を無償でしき使  
いやがつて

城「どこに行つてきたんだ？」

百代「学園にな。なんか力仕事が多いから、手伝つてな。面倒だ  
から逃げてきたけど」

そんなんでいいんかい。俺が言つのもなんだけど。

百代「で、なんでユキと城がいるんだ？もしかして私とたたか「今日は別件です」つまらんな～」

ユキを降ろし、指を咥えてこっちを見てくる。  
そんな目してもだるいから戦いたくないっての。

小雪「ワン子の修行の成果を見にきたんだよ～」

百代「ワン子の？」

一子「そりやつー生まれ変わったあたしを見て驚かないでよねー！」

小雪「僕に勝てるのかな～？」

一子「城の技を習得したあたしはユキなんて目じやないわ  
余程自身があるのか、見栄を張つているのか……」

小雪「ほんとかな～。僕だつて城の必殺技使えるもん」

ユキと一子の対戦成績は8割がユキの勝利。こうみえてもユキは俺と親父の指導と特訓に付き合つてたからな。かなりの実力者だ。  
ユキの戦闘スタイルは基本素手。テコンドーの使い手である。俺が漫画の主人公の使う必殺技がカッコ良かつたので、見様見真似で俺も習得し、ユキにも指南してやつたのである。

親父から剣術について学んでいるので、剣類の扱いにも長けている。

一子「ふつふ～ん。天狗面しているのも今のうちだけよ。それじゃ、

薙刀を取つてくるわ

ワン子は意氣揚々として院に戻つて行つた。

百代「……ワン子」

その後姿をモモ先輩が悲痛な表情で見ていた。

……モモ先輩もワン子のことに気が付いているのか……

努力はあつても戦いの才能が薄いということを……

一子「よーーっし、張り切つて行くわよ——！」

ブンブンと薙刀を頭上でプロペラみたいに振り回す。

俺、ユキ、モモ先輩はワン子が岳人の5倍はある大きさの岩と対峙しているのを突つ立つて傍観している。

百代「なあ、城。お前から見てワン子のソニックブームの完成率はどうくらいだ？」

ワン子に視線を向けながら、聞いてきた。

城「前回の結果から、ワン子の努力をたして計算するに…… 50パーセントぐらいかな」

百代「ちょうど半分か」

小雪「それでも、威力は高いんでしょ?」

城「元々ソニックブームは気を使用して放つものだ。相当な化け物じゃないかぎり、生身の人間ができるもんじゃない」

100パーセントの力を發揮して、ワン子のソニックブームと俺のソニックブームがぶつかりあつたら、打ち負けるのはワン子のほうだ。

百代「……なんで私を見ながら言つ」

俺の視線に気に触ったのか、ジト目で見てくる。

城「だつて、あなた歩く核兵器じゃないですか」

百代「チートキャラのお前が言つが!-?」

城「俺は自覚していますから」

百代「すまし顔で返す。

百代「その顔……腹立つんだが!」

ショボッ！

城「ほいっ」

パシッ

モモ先輩のナウマンゾウ♂頭分はあると思われる拳を片手でこなす。俺の片手の頑丈差はマンモス♂の頭分です。

百代「本気で頭蓋を粉碎しようとしたのに、いつも簡単に防ぐとは……わすがだな」

城「あんた俺を殺すきかよ……！」

俺じゃなかつたら死んでたぞ！――

小雪「あ、ワン子が構え始めたよ」

ユキの声で、いがみ合っていた俺たちはワン子に目を移す。見ると、ワン子は居合いの構えに入っていた。

一子「はああああああああああああ」

れてはて……どうなる」とやう。

一子「城直伝―迅速なる刃

」

この掛け声は俺が言えといったものだ。必殺技にカツ「いい掛け声は必須だしな。ワン子も満更でもないし。

一子「ソニックブーム音速派！」

薙刀が横に振り払われ、三日月形の衝撃波が放たれ

スパツ

岩が斜めに切り落とされた。

ズズー——————ン！

小雪「岩が真っ二つになっちゃったね」

百代「……城」

城「……」

なにも言わずにワシントンのところへ歩み寄っていく。

一子「…………どうだった？」

真剣な表情だが、その太陽の輝きを持つ瞳の奥には僅かの不安がみられる。

城「……」

軽く息を吸って一子に言い渡す。

城「本来のソニックブームなら、あの程度の岩石は木つ端微塵にで  
きる」

「子」「……」

唇を噛み締め俯く。

やれやれ……早急なやつだな。先急ぐなっての。

城「だがそれは『氣を扱つのが前提だからな』

「子」「え……？」

城「『氣を使用しない』ソーシャクブームなら、あれでも上出来だ」

「子」「それじゃあー

城「合格だ。これまで良く頑張ったな

ワンドの頭を撫でる。

「子」「……」「う、

城「え、う、なんで泣くんだけよー？」

外野が『なーかした、なーかした』と離し立ててくれる。  
俺が悪いのかよー

「子」「違ひの……やつと技が完成して……城に撫でられたら嬉しくな  
つちやつて」

『う』と顔を拭い、笑いかけてくる。

……不覚にもかわいいと思つてしまつたのは内緒だ。

百代「おい、なに妹と2人で良い雰囲気になつてんだ」

小雪「なつてんだー」

城「ぐはあつ！」

突然の衝撃に俺は吹き飛んでしまう。

あいつら一本氣で蹴つておやがつた！！

一子「あ、あたしと城が  
……  
？」

百代「おめでとう、ワン子。さすがは私の  
赤くなつてないか?」「ん?なんか顔が

「そ、それはただ暑いだけよ。お姉さま」

百代「そうか？なら私の勘違いか？」

いたたたた……ワン子に注意が戻ってだから障壁を張りわすこふこ！

小雪一月二日、女説じよーだナビ十分だ！」

城一なに言つてんのか、さへはりわからんぞ!!!重いとけ!!

昨日の晩にまた俺に乗つかかってきやがた

「やがて、それが私の足の運びをダメージにしてしまう」

グリツ！ゴリツ！

百代「おねーさんに向かってその口の聞き方は……矯正の余地があるな」

小雪「んしょ。これくらいの大きさでいいかな？」

ユキとモモ先輩のポジションが入れ替わり、さつきワン子が切り裂いた断石の半分が、ユキの両腕の中に抱えられていた。

城「ユキ！それはヤバいって！！！いだあ！モモ先輩爪が食い込んでるつて！！ワン子————！！！た、助けてくれ————！！！」

唯一、リンチに参加していないワン子にヘルプコールを出すが……

城「つて、いない！？」

ワン子がいた跡は広い芝生しかありませんでした。

百代「ワン子には軽くシャワーを浴びて」こと言つておいたからな。  
お前の味方はここにはいないぞ」

ひよつとして…… 話んだ?

小雪「えーい、岩石落とし~」

この日川神院で、一人青年の断末魔  
が川神市全体に行き届いたといふ……

「ナニヤシロマロアラタナリ、しかし手で抜いてしまったー」（後書き）

あ~~~~~。この小説を同時に書いているから、更新がおせえー。  
しかも受験勉強とか……やつてられるがボケー—————  
!!

## 朝の登校風景その1

城「戸締りオーケー、電機も消したし……行くとしますか。……もしも～し、コキ起きてるか?」

玄関の鍵を閉め、体を反転せると、コキが立ちながら寝ていた。

小雪「ん～～……起きてるよ～～」

田を瞑りながら返事をする。  
器用なやつだ。

城「つたぐ。睡眠時間を削つてまで起こしてないでここつての」

鞄を肩に担いで歩きだす。深夜になりながらもコキは趣味の紙芝居を作成していたらしく、そのせいで今にも寝そべりになつていてるのである。なのに律儀にもコキは体に鞭打つてまで、起こして来てくれたのは嬉しいんだが……これじゃ本末転倒だろ。

小雪「そしたら城……寝坊するじやん……ねむい」

中学生の時に、コキが風邪を引いて、家に起こしこれなかつた時俺は毎晩起きたんだつけ。

あの時は担任にめつせや切れられたな……

城「出席日数はかなり足りてるし、一回くへり遅刻したって問題ないつての。だから、眠い時はしっかりと」

ん? やつさまで隣りに歩いていたコキがいない。

ビ」「こつた？後ろを振り返つてみたら

小雪「ணணண」

道のど真ん中でぐで～つとうつ伏せに垂れて、寝ていた。  
急ぎ足でコキのもとに向かひ。

城「おーー！こんなとこで寝るなー注田の的だぞー。」

小雪「あと五分だけ～……ほんと～」

城「らき たネタは古いぞー。」

あーもうー！他の一般人が何事かと物珍しそうに見ているじやねえか！  
しょうがないか……

城「ほら、やつと乗れ。途中まではおぶつてやるから

腰を降ろしあんぶの体勢に入る。

見世物になつちまつが、ここでもなつこしてこよつけマシだ。

小雪「うたひ……」

首に腕を回され、背中に乗つたのを確認して、コキを背負つて歩いていく。

みんなと合流する前になつたら起こすか。  
どうかそれまでは知り合こに見られませよつよつ……！

さて…… わたすぐ、こつものとに着くから口キを起しそうか。

城「ユキー、起きろー。後は自分で歩きな」

背中を揺さぶる。

小雪「うーーーまだねむこよー」

城「みんなが来るぞ」

小町「じゃあ…… 任せや～」

ゆづくりと降りる。

城「学校に着くまでは我慢しな。授業中に寝ればいいだろ」

ユキの成績は一年の後期期末以外のテストは20位に入るほどの実力者だ。授業中では寝るか、紙芝居を作るなどと、他のことをやっているらしいんだが、なぜか頭が良い。

小雪「ルーファ~~~~~」

なんか俺まで眠くなつてきた

ユキの欠伸に釣られたかもな……マジ眠い。

京「おはよう師岡卓也。」2-F 所属趣味ネットや漫画「

卓也「なんだかえらく説明的だなあ」

京「モロは影が薄いから存在を確認しないと忘れそうで」

卓也「どうして、僕と顔を合わせた人は揃いに揃つて、同じ事を言うのかなあ……」

岳人「それはお前がサブキャラだからだろ」

卓也「それを言つたら岳人もでしょ」

大和「なに言つてんだお前ら？」

岳人「なんか言わなきやならない気がしたんだよ。京のやつ朝にかられて機嫌が悪いんだよ」

卓也「……ああ、そういうこと。つてか、京に影薄いとか言われたくないよ！」

京「今日もナイスツッコミでようじー」

岳人「モロはいつだつて精一杯生きてるよな」

卓也「（無視）あれ、キャップはまだどこへともなく？」

大和「消えた。ま、気にすんな」

京「モロ。顔にやけすぎ、軽く気持ち悪いよ」

卓也「（ジャンプ読書中）今週のトラルは中々Hで良かつたんだ

よ

岳人「お、マジで？何回パンツ出た？」

卓也「見てよこのシャワーシーン、これ単行本だと乳首書き足されてるね」

岳人「どれどれパンツのどこだけ見せろ！」

卓也「しかもほら、捕まつたヒロインの足元にチラリとアメーバが見えてるじゃん。」これ来週襲われるつてサイン

小雪「おー、縞パンだー」

城「これはまた、中坊にはまだ過激すぎるシーンを……」

モロの手元のジャンプを後ろから、覗き見る。

卓也&大和「岳人」「うわあ（のわあ）…………」

城「はよっす」

小雪「おっは～」

大和「おはよ～。城、ユキ」

京「おはよ～2人共」

驚いた際にモロの手から、上に放り投げられたジャンプが俺の地点に落下していく。

それ片手で、なんなくキャッチする。

城「今週号のか。放課後になつたら俺も買おうとするかな」

これは俺の生きがいと言つても過言ではないからな。

京「それは過言であつて欲しいよ」

城「心を読まないでくれ。ほれ」

ジャンプをモロに投げ返す。

卓也「きゅ、急に出てこないでよー。びっくりするじゃないかーー！」

岳人「一声ぐらいかけろつての。これで心臓が停止して死んじまつたらどうすんだ」

城「そのまま死ねば？あ、お前の遺品は俺が引き取つてやるから安心して逝けよ」

岳人「やらねえよーーお前にやるんだつたら、百歩譲つてモロに渡すつてのーー」

卓也「そこのはもつと譲歩してよー」

小雪「やーー、モロのムツシリスケベー。岳人のレ パー」

卓也「む、ムツシリーー？」

岳人「エロシーン見てるだけで、そんな不名誉を『えられるのかよ

「……つか、なんでユキがなんこと知つてんだよ……」

小雪「城が「いつか岳人は性犯罪を犯すだろ?から、あいつのあだ名はレ パーって呼ぶことにしようぜ」って言つてたから」

あー、んな」と言つたような言つてないような……忘れた。

岳人「お、俺様がそんなことを…………するわけないだろーー!」

大和「今の間はなんだ」

城「お前……マジでやるんじゃないだろ?な?」

卓也「岳人……さすがにそれはどん引きするよ」

京「岳人……最低」

小雪「サイテー」

全員から白い目で見られる岳人(ユキだけはいつも通りで楽しそうにだが)

岳人「そ、そういうことは妄想の中だけですることなんだよーーそこのところには俺様も区別できてるんだからなーー!」

大和「いや、当たり前だろ」

卓也「現実でやつたら、普通に捕まるからね……」

京「なにもしなくても岳人は逮捕されると思う」

小雪「岳人に近寄ると妊娠されるって、噂が立つてるとんねー」

城「幼馴染から犯罪者が出るよくなことだけは勘弁してくれよな」

俺たちまで被害が及ぶからな。

害を受けるのは岳人だけで十分だ。

みんなで岳人弄りをしていると

? ? ? 「あ、ナオっち、椎名っち、城君、ユッキーおはよー」

前を行く女子グループの1人に挨拶された。

その女子は小笠原千花。去年も今年もFクラスつまり、同じクラスメイトってことだ。

スタイルが抜群で今風の年頃女子つて感じの女の子だ。男子と女子にも人気があるが、一部の男子には嫌われているらしい。

大和「おはようー」

城「ういーっす」

小雪「おはろーん」

京「……」

京だけは完全無視。人見知りが激しいというより、風間ファミリー以外の人間はそこらへんに転がっている石ころと同じ認識なんだろう。

大和「…おい、京挨拶」

京「ん」

大和に言われて軽く会釈する。せめて相手の目を見ろよ。

卓也「ナオっちーだつてさ。もてるねははは」

岳人「城に至つては君付けかよ。つか、なんで俺様に挨拶はねえんだよ」

京「顔寄せ合つて漫画読んでHな発言してるから」

城「ゴリラに挨拶なんて必要ないからだろ」

岳人「てめえ、この俺様の一体どじがゴリラだつてんだよ」

鏡があつたら見せてやりたい。

小雪「師岡卓也。種族秋葉族。このカードが場に存在する限り他の人間はこのカードに話しかけることができナッシング」

卓也「なにそのモンスター扱い！？種族秋葉族つてなにさー？本当にカードにありそうな説明はやめてよーーー！」

今日もモロの突っ込みのキレは絶好調だな。

岳人「けつ、貧弱モヤシ野郎よりは野性味溢れる俺様の方が女子の受けが良いに決まってるぜ」

受けと言つ言葉に京が「岳×卓……」と呟いていた。

そういうや漫研がそんな同人誌を売り出していたつけ。売り上げはあんま良くなかったはずだが。

卓也「よく言つよ。岳人は頭が貧弱の癖に！」

大和「相変わらず仲がいいねお前ら……」

京「あの2人からは、こう…B-的なエナジーを感じる」

大和「それはお前がそういうのを好きだけだ」

城「バカでホモでオタクって、救いようがないな」

小雪「岳×卓？」

城「ユキ、どこでそんな言葉を覚えた？」

小雪「京から借りた本に載つてた」

城「京、後でちょっと裏行こつか」

京「え、遠慮しとく」

俺の微かな威圧感を敏感に感じ取つた京は冷や汗を搔き、後ずさりする（どさくさにまぎれて大和の方に擦り寄つて行き、大和に引き剥がされていた）

まったく、ユキなんてことを教えるんだ。ユキにはまだ早いわ！――

卓也「（岳人だけには男として負けたくない！）」

岳人「モロにはぜつて一男として負けたくねえ！」

バカ2人はお互いバックに動物（モロはハムスター。岳人はゴリラ）を味方に付け睨みあつていた。

大和「なんであそこに人だかりができるているんだ？」

ん？ 数十人の人だかりがいるな。川岸の向こうには……見るからに不良ぶつた雑魚どもが犯罪者を包囲するように囲んでいた。  
……またあの人か。物好きだねえ」

大和「ああ、なんてこつた」

大和は頭を抱えてあたふたしていた。  
大袈裟なやつだ。

京「これは朝から大ピンチ」

不良たちがな。

卓也「早く止めないと大変なことになっちゃうよコレ」

不良たちがな。

大和「やはり流れ的に俺が行くのか」

岳人「つか、お前弟だろ」

大和「弟つづーか、弟分なんだけど……俺よりもっと適任なやつが

全員の視線が俺に集中する。

俺に行こうってか

城「俺かいな。」  
説得ならモロか大和の十八番だろ」

卓也「む、無理だよー。」

「このへタレぬ。

大和「万が一のことを考えたら、城が行つた方がいい」

小雪「城は最強だもんね」

「むむ……」**「キニヤウ」**言われたら、「めんどくさうだから、バス」なんて言  
い、「ひひー。

城「じゃ、ちょっとから行ってきますわ」

不良たちの元にのんびりと歩いていく。

城「はーい、こ・ん・に・ち・わ〜〜〜」

優しいお兄さんを演じて、話しかけた。一斉に不良たちは俺に振り向く。

不良A「ああん？なんだてめえは」

リーゼントで鼻にピアスとか古すぎだつての。  
形から作るより、中身を固めろよ。

城「私ですか？通りすがりの正義の味方、……その名もジヨーだ！…」

不良A「ジヨー？おい、お前ら知ってるか？」

『知らん』

城「なんだとつ？貴様らこの私を知らないとは……モグリか？」

不良A「しらねーよ、んなダサイ名前なんて俺たちの地元千葉に情報は入つてねーぜ」

千葉から来たのかよ……暇なんだなこいつら。

城「この女性の情報はあるつてのか？」

俺これでも武道四天王の一人なんですが。4年前に元四天王の橋を腕試しつつ一ことでボコして、四天王の称号をもらつた。  
知名度低い俺。低くていいけど。

不良D「おうよ。川神百代だろ？最強と名高い鬼人だつてな

鬼人じやなくて、奇人の間違いだと思いますが？

不良E「クチャクチャ。だからあいさつにきたつてわけだよ

城「あ、それほどひどい……」

不良F「いえ、いかにもちのあこせつじやねーよーーー！」

城「ナイス突っ込み。モロには足元にも及ばないが、もつと磨けば輝きを増すと思うぜえい？」

不良A「い、この馬鹿にしゃがって！女ともども地獄に葬つてやるよーー！」

あらあら、近頃の若者は気が短い」とで。

百代「テトリストか。なつかしいな」

お、やつをまで黙っていたモモ先輩が喋り出した。久々の生贊が見つかって、気分も良いみたいだな。

不良E「クチャクチャ。あ？なに言つてんだお前」

百代「お前の携帯ストラップだよ。それテトリストのブロックだろ」

不良K「だから何だつらああ！関係ねーだろつがあーー？」

だつらああ つて、言いづらくないか？ ら上がり口調にする意味あるの？

不良C「つづか何落ち着いてんだお前ーームカツクぜー！」

つて、ちびーょーーーそつ

城「お前はキモイズエ」

不良の「んだとわりやあーー！」

不良A「てめえら……黙つてりやいい気になりやがつてー覚悟しろよー。」

城「いや、黙つてなこじやん。隣つぽなしじやん」

不良E「クチャクチャ。このクソガキが！死に晒せえ！！」

が  
ガムを噛みながら釘バットを持って、俺に突っ込んできようとした

百代「おこおい、お前らの相手は」の私だぞ？」

不良E「ギシシ?!」

の前に、モモ先輩が男の腕関節を180度曲げた。

不良E「い、いてえええええ！俺の腕があああああ！！！」

不良A 一  
て  
てめえ！船橋君をやりやがったな！」

船橋つて言つんだあいつ。やられ役に名前なんて無いと思つてたんだが違うのか。

不良じ「みんなでヤツちまえええ！－！－！」

『 ସବୁ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା ... 』

その掛け声は死亡フラグだぞ~~~~

百代「遅い！！お前ら赤子か！？」

全員吹っ飛ばされていた。

観客からは待つてましたとばかりに、歓声が沸きおこる。

不良C「俺にキモイって言つたことをあの世で後悔しやがれえええ  
え！！」

1人だけモモ先輩ではなく、俺にノコギリを持つて飛び掛ってきた  
……良いこと思いついた。

城「気合防御！！」

両腕に氣を込め、ガードする。

バキヤアアアアアン！

不良C「は？」

目が点になる名も無き不良。なにが起つたのか把握しきれてない  
みたいですね。

ま、人を切ろうとしたら逆にノコギリが碎け散つまたんだから、  
そつもなるか。

城「俺に喧嘩を売るなんて、身の程知らずも甚だしいな。そおい！」

不良の胸倉を掴み、ある方向に向かつて放り投げる。

！」

その方向とは

卓也「うわあー！」机に投げてきたよー。」

大和「なに考えてやがんだあいつ？！」

京「……大和は私が守る（大和の前に立つ）」

岳人「大和だけかよ！！」

## 小雪「フェイスナックル」

コンボが繋がった！  
2 HIT damage 863

コキの強烈なストレートが不良の顔面に減り込み、円を描きながら不良がこっちに飛んできた。

卓也「ふう……助かつたよユキ」

岳人「かわいい顔して、やることはエグイなお前」

京「さすがはユキ。綺麗に不良の顔に入つたね」

小雪「えっへん。すごいだろ~」

大和「……女に守られるつてなんかな……」

京「大和は生涯をかけて、私が守つてあげるからね」

大和「かけなくていいです」

城「また飛ばされにきたのか。お前も氣質でもあるのか?」

不良「ち」  
「ちが」

城「では思う存分に宙を舞つていってくださいませ」

今度は腹に蹴りを叩き込み、もう一度みんなの方に送り返す。

不良「お世話おねがいおおおー??.?.?.」

3  
H  
I  
T!  
D  
a  
m  
a  
g  
e  
1  
3  
9  
8

胃液を吐いていたが、血ではないのでセーフ。

小雪「またきたよー」

岳人「今度は俺様に任せろ！ シエルター・タックル！！」

コンボが繋がった！――！  
4 HIT damage 1888

卓也「あの人死ぬんじゃないかな……。それと岳人シェルターじゃなくて、ショルダーだからね」

京「城、力加減はしてるみたいだから、大丈夫だと思'よ」

大和「あれでか……？」

また飛んできたな。そろそろ飽きてきたし、モモ先輩んとこに吹っ飛ばしてフイニッショウとしますか。

城「じゃあね～～生きていたら、知り合いにでもなつてあげてもいいぞ」

不良し「ほゞやああああああああああああああああ」

横つ腹に蹴りをかまし、モモ先輩んとこに吹っ飛ばした。

城「モモ先輩ーー、バスつす」

卷之三

不良たちの関節を外しながら、返事をしてきた。

観客A「さすがは『怠惰な帝王』と呼ばれる」とださあるセーー。」

觀客B「キヤ————！城君素敵————！」

觀客D「城×翔…………うふふふ」

モモ先輩だけじゃなく、俺にまで声援？を送つてきた。  
……1人なんかおかしいのがいたが。

城「ただいまー」

「大和&卓也&岳人」「うおわつ（うわつ）！？」

瞬間移動をして、突如現れた俺に男陣が驚く。

小雪「おかえり」

京「おかれり。モモ先輩もすゞいけど、城もすゞかつたよ」

コキと京は平然として迎えてくれた。風間ファミリーは俺を除いた男性陣より、女性陣たちの方が立場強いんだよな。

卓也「心臓に悪いが……」

城「それより、モモ先輩はどうなつてんだ？」

大和「テトリスに挑戦してる」

テトリス……ねえ。子供が聞いたらやりたいと言うだろうが、モモ先輩の言つテトリスとは闇のゲームより恐ろしいゲームだからお薦めはしない。

百代「助かりたいか。ならばチャンスをやるつ。ナイスなギャグで私をクスリとさせたら許そつ」

不良K「ぎゃ、ギャグ！？」

百代「なにも言わなかつたり、そんなの無理とか言わないほうが多いぞ～。もつと私を怒らせることになるからな。ふふふふ」

不良K「ひいい、ええええええ～～完全に悪じゃねーか～～」

今までに公開処刑が始まろうとしていた。  
ギャグつて……あの人完全に楽しんでいるよな。

京「相手が卑怯な真似するから完全うだね」

それも極度のな。

百代「さあ、ガツンとギャグを言つてみる！～」

不良K「あ、ああアメリカンジョークでもいいっスか！」

百代「その心意気やよし」

不良K「石が落ちた！ストーン！」

さぶつ！春先だつてのに鳥肌がたつ程に寒いんですけどつ――！

百代一まず、左腕な、はい力抜いてー！」

左腕の関節をボツキリと外していた。

川は落としない衝動が  
湧き上がつてくるだろうからしようがない。

いる当人は不良どもを上に積んでいった。

百代一ふふつゝ美しく積みあがつたな

大和姉さん、これもはやホラーだから」

大和が俺たちから離れ、モモ先輩んとこに向かつていつた。

百代「おつとテトリスは並んだら消さないとな」

そう言って、人間タワーに回し蹴りで不良たちを遙か彼方に吹っ飛ばした。

小雪「たまやー」

城「花火にしちや、味気ないな」

卓也「花火じゃないでしょ……」

城「ここに本物があるけど？」

制服の懷から一つの六尺球を取り出す。

卓也「ええっ！？なんでそんなもの持ってるのー？？」  
「うかうかで、  
その大きさのものが制服の中にー？」

岳人「マジで本物なのか？」

「本物だよ。一年前に僕も手伝つたんだー」

京「無駄にハイスペックだよね。でも、花火作るのって資格が必要じゃなかつた?」

城「そんなものに縛られる城さんではないのです」

卓也「そういう問題じゃないでしょーーー」

岳人「ちょっと待て。つまり、火薬の塊つてことだろ？」

城「ああ。破裂するといこの辺り一面は焼け野原になるだらうな」

ビルに向かつて打ち込めば余裕で粉々できる威力がある。

卓也「うわああああああああー！」れつて爆弾そのものじゃないか！」

城「つと」

手からすべり落ち、地面に触れ

岳人「うおおおおおおおおおおおおつつつつ」

ズザ――ツ――！

なかつた。岳人が寸でのところで滑り込みキャッチした。

城「火が点いてないうちは大丈夫だ」

六尺球を制服の懷に戻す。

これは俺が暇一ふして改造成した制服で、各ホケツトセ懐の中には異次元空間になつてゐる。アニメで例えると灼眼のシャナのシャナが愛用する夜笠だ。

卓也「い、生きた心地がしないよ……」

京「私は死ぬ時大和と一緒にやなきやヤダ」

小雪「その大和、モモ先輩に『レーデレ』してくるよ~」

京「ツ！」

小雪以外「「「ツ！？」」

み、京から尋常じやない殺氣が……。この俺ですら冷や汗が止まらない。岳人とモロはお互い抱きついて震えている。

……やつぱホモなんだな。

小雪「あ、なんか凄いスピードであっちに突撃していつてる」

ユキが指すところには一年生と思われる女性徒のグループがいた。

大和「まーた始まつた。娘あさりが……」

大和がこっちに戻ってきた。モモ先輩は1人の美少女をお姫様抱っこをして、恍惚に顔を綻ばせていた。

京「この浮氣者……信じて……信じていたのにつ……」

大和「浮氣もなにも、お前と俺はそんな関係じやないだろー？うおつ、ど、どこ触つてんだ！！」

なんだかんだで、嬉しそうじゃないか。これが男の性つてやつか……

百代「ふふん、みたかお前らあの娘完全に脈ありだ」

満足そうにやつてきた。

ホモに百合に変態……風間ファミリーの半分がアレなメンバーって嫌だ……

岳人「みたか、じゃねえよモモ先輩」

百代「なん？」

岳人「いつもかわいい女の子を一人で持つていきすぎ！俺にも回してくれよ！」

城「男にも興味があつて女にも興味があるのか。見境なさすぎだろ」

岳人「俺にそつちの気はねえよ！女一筋だ！！」

ナンパしまくるやつが一筋つつても……ねえ。

百代「いやだね。欲しけりや自分で調達すればいいだろう。まあ、かわいければ私が略奪するが。ふふふ」

小雪「ドロドロの三角関係だ〜」

城「岳人なんかに彼女が出来るわけないから、そんな事が起きるわけないだろ」

岳人「俺様が本気になれば、女の10人や100人くらい物にできるつての！！」

卓也「サバ読みすぎだよ」

女に振られた人数は100を超えてるが。

岳人「美人の女好きって超もつたいねえよ……」

百代「おいおい、私は別に根っからの女好きってわけじゃないんだぞ岳人。ただ周囲の男が魅力なくちゃな。女の子にもちょっとかいを出すさ」

卓也「先輩のハードルが高すぎるんだって。みんな「俺には無理」って言ってアピールすらしないし」

岳人「俺様はそんな軟弱コンブどもは一味違うぜ！タフガイな俺様

と付き合ってくれー・男の素晴らしさを教えてみせる」

下心全開つてことが見え見えた。ソレまで本能と欲望に中心なやつも珍しい。

京「いきなり告白とか頭大丈夫岳人？」

大和「お前もいきなり告白やつてるけどな」

じつちもどりだね。

百代「だめだ、魂がこもつてない。それより以前にムサすぎてアウトだ」

ばつさりと切り捨てられていた。

城「これで失恋記録更新だな」

「イエーイ。記念を塗り替えた岳人にバナナをプレゼント♪」

岳人「ありがとよ、ユキ。そんなお前の気遣いに心打たれた。この俺様と付き合ってくれ！」

小説「死神」

城「コキに手を出してんじゃねえーーーー！」

気合パンチ！！！

ドボー——ン！！！  
川に落としてやった。

京「モモ先輩に告白して、振られた瞬間にユキに告白……アホだね」  
卓也「会話の流れが不自然すぎだよね。あのバナナは気遣つたんじ  
ゃなくて、バカにしたとしか思えないんだけど」

大和「同情を通り越して憐れに思えてくる」

百代「バカはほつといて、行くぞー」

空の旅を終え、地上で死屍累々としてる男どもと岳人を放置して歩  
き出す。

小雪「城いこー」

ん？ユキの顔が少し赤くなつてるような……ま、いいか。

城「そうだな」

岳人がずぶ濡れで這い上がってきたのが、視界の隅で見えた。  
……そのまま沈んでいりやいいのに。



## 朝の登校風景その1（後書き）

暑くなつたので、図切ました。

ヒーローといメイド。勝てねえ（「このひのトンシショーパー

みんなと（岳人含め）一年生の春休みにあつた行事の「じと（ひよつ  
とした泊りがけの旅行で）で話していると毎度お馴染み変態橋に到  
着した。

さて、今日はどんな変人に遭遇するかな」と。

？？？「フハハハハハハハハハハ

げ！この高笑いと人力車の音は……

岳人「おい、城。お前のお友達がやつてきたぞ」

城「なにがだ？俺には高笑いなんて聞こえないぜ？」「ん。聞こえない  
い聞こえない」

京「現実逃避したくのもわかるけど、しつかりと現実を受け止めて

城「…………」

小雪「元気だせー。はい、マシュマロ。新作オロ ミン味」

オロナ ン味つて……マシュマロとミスマッチすぎる。  
ま、食べるけど。マシュマロ好きだし。  
炭酸と甘さが交互に……なんつーか、コーラをお茶に混ぜ合わせた  
変な味。一言で言つならば不味い。

？？？「おはよつ庶民…そして、我が永遠の友、城よーー。」

城「……はよつ。朝からテンションマックスだなヒーロー『英雄』」

バカでかい声が頭に響く。

こいつは九鬼英雄。九鬼財閥の御曹司で学年1年の金持ちで色々と援助もしているらしい。

中学生の頃俺は月に4回だけ野球部の助つ人として駆り出していた。その時に英雄と出会い、俺の野球センスに目を付けた英雄が俺を本格的に勧誘してきたが、俺は風間ファミリーに入ってるから丁重に断らせてもらった。だが、野球の話で盛り上がる事も多かつたので、なんだかんだで仲良くなつたのだ。

英雄「ヒーローと書いて英雄と読むのではない！英雄と書いてヒーローと読むのだ！」

どつちでも同じだろ？が。

……こいつの金ぴかに輝く制服が、太陽の日光に反射して眩しい。

メイド「おやおや、城君に小雪さんじゃないですか。おはよつ！」  
います「

人力車を引っ張つている年齢不詳のメイドがあいさつしてきた。

小雪「おっはよー、ヒーロー、あずみ」

城「ちつす。お前に君付けされると気持ち悪いからやめれ」

あずみ「お気に召しませんでしたか？（てめえ、英雄様に余計なこと言つたらただじゃおかねーぞー）」

城「……ま、呼び名なんてどつでもいいから好きに呼んでくれ（は

つ、やれるもんならやつてみな。腹黒メイドにやられるほど俺は落ちぶれちゃいねーよ」

お互に口には出さずに田で罵倒しまくる。英雄の専属メイド、忍足あずみとは色々と競い合つてゐるライバル？みたいな関係だ。

英雄のメイドになる前はどこの国に所屬していたと言つていたが、この身のこなしからして眞実だろ？。

英雄「うむ。小雪よ、Fクラスに移転してしまつてからといつも冬馬とハゲの元気が前より無くなつてあるのだ。なので、城と共にいつでも我が陣営に訪れるがいい」

小雪「言われなくとも、そつするつもりだったもんねー」

城「あいつらとは友達だからな。あいつらがこなくともさから攻め込んでやるや」

英雄「うむー。それでこそ我が友だ！城のおかげで今の我があるので困ったことがあればなんでも尋ねるがよいー。いつでも力になつてやるつぞーー！」

あずみ「さつすが英雄様！英雄様こそが多くの者の頂点に立てる王者ですー！」

英雄は過去に海外に出向き、テロに巻き込まれ肩が使えなくなつたことがある。世界一の腕利きの医者に一度と直らないと告げられ、絶望していた時に俺とユキが気合注入をした。なのでユキともそことの縁を築いている。

その肩だが、俺がチート能力を使いケアルガの超強化版を唱え治癒したのだ。それっぽく手術室で行つたのでケアルガを使つたことは

誰にも知られていらない。

今では英雄は他の部員とは比べ物にならない程の実力の持ち主で、4番エースでキャプテンを務めている。  
俺も時々練習に参加している。

城「あー、はいはい。わかつたから早くいきな。S組みのお前らは朝からやることがあんじやねーのか？」

英雄「うむ。たしかにやらなければならぬことがあるが、その前に我の天使に朝のあいさつを済ませなければならぬのだ！」

ワン子のことか……。1時期なにもかも無氣力になっていた英雄がワン子に元気付けられたことで、惚れたらしいが……その恋が報われるのかは謎だ。

百代「残念だが、妹はここにいないぞ。鍛錬してるからな」

英雄「おおさすが一子どもの。日々の切磋琢磨こそ武士！我也負けておられん行くぞあずみ！」

あずみ「了解しましたー（次会つた時がてめえの命日だからなー！）

人力車に乗り込み、暗黒メイドが取つ手を持つ。

あのヤロー……俺にだけわかるようにガンぐれてやがった。マジでむかつく。

英雄「ではさらばだ！我が友、城、ユキよーその他庶民もまた会おうぞー！」

……去つていつた。

小雪「まつたね~」

卓也「あれつて法廷速度守つてるのかなあ

城「あこひりに常識といつ概念はない」

720度世界と考え方も違う。悪いやつではないんだがな。  
ちよつと……いや、かなり頭のネジが外れているだけで……S組み  
の中ではマシな分類に別けられる。S組みの中だけだが。

百代「相変わらずあのメイドやるな。モロたちにはわからんかもし  
れんが隙がないぞ」

城「英雄の身の周りの世話だけじゃなくて護衛も兼ねているらしく  
からな。学園の中でも屈指の腕前を持っているだろうよ」

卓也「一人で人力車引いて自動車並の速度出してるの見りやタダ者  
じやないってわかるつて」

小雪「でも、マシユママロとかお菓子くれるしいい人だよ?」

だから、やつかいなんだよな。性格腹黒で英雄の前じや猫被つて、  
隠し通してゐしよ。相手をするのがマジでめんどう。ユキは餌付け  
されてるからあいつのこと慕つてゐし……

京「ユキ、知らない人にお菓子で誘われてもついていつちやだめだ  
からね」

大和「朝から誘惑していた人がなにを仰いますか？」

小雪「もーまんたーい。城に護身術とか不審者撃退方法を教えてもらってるもん」

襲われそうになつたら、目を潰せとか急所を狙えとかそんなことばかりだけどな。

中学に上がる何年か前ユキはいじめの対象とされていた。それが沈静化してきた頃に俺はユキにある物をプレゼントした。

… それはシルバーペンダントだ。一見はただの星型の装飾品だが、これには俺が魔力を込めた代物である。その力は身に着けている者が危険な状態になると魔力を注入した者……つまり俺にそのことを察知させられる。

これを渡した理由は純粋にプレゼントしたいというだけではない。もしも、ユキが俺たちの手が届かないところでいじめを受けていたら、ペンドントの効力でユキのいる位置を特定でき助けにいけるからだ。

今でもユキは机身離さず首に掛けている。そこまで大事にしてくれてるとあげた甲斐があつたつてもんだ。

一子「みんなーーーっ、おはようーーーっ！ーーー！」

英雄の想い人ワン子……もとい犬がロープにタイワを2つ引きずつて走ってきた。

百代「お、噂をすれば妹が来たぞ」

京「やつ（拳手）」

小雪「ほつ（両手でメガホンを作る）」

城「やまびこかよ。ついでにおまよつ」

大和「挨拶についてでっておかしいだろ。おはよ」

ユキに俺がツツコんで大和が俺にツツコミをして（これをツツコミ  
3連回しどう）体操服姿のワン子に挨拶。

岳人「おはわん子」

卓也「おはようわん子」

一子「なんか川辺で大勢伸びていたけど、お姉さま？」

あのテト里斯野郎たちを見てきたのか。腕と足が曲がってはいけない方向に曲がっているから、ちいさい子供が見たら泣くよな。

百代「ああ。つまらない相手だったな」

一子「あはっ、やっぱり凄いや」

岳人「ワン子。今日は引きずっといるタイヤは2つか」

一子「うん。その分川沿いに東京まで行つてきたよ」

東京から川神市の距離はおよそ80キロはあります。到底走つていける距離ではありません（適用されるのは一般人のみ）

卓也「朝だつてのに元気だね……」

一子「いっぱい鍛えないといけないもん。あたしはお姉さまに比べるとまだまだだから」「

百代「健気だる。じうだ自慢の妹だぞ」

一子「いやー、照れるなー」

後頭部をぽりぽり搔く。

その情熱の一割でも勉強に向ければ良いんだが」「

一子「む、なによ城。あたしが馬鹿だつていいたいの?」「

照れの表情から一転して、俺を睨んできた。

城「ありや、俺声に出しちた?」

大和「おもいつきりな

気がつかなかつた……

城「ではこの場にいるみなさんに聞いてみましようか。ワン子が馬鹿だと思っている人は手を挙げないで下さい」

橋を渡つている人にも呼びかける。

……誰も手を挙げない。

城「というわけで、お前は他人にも認められているほどのバカだ。誇つていいぞ」

一子「質問の仕方がおかしいわよ!そんなの誇れるどこのか汚名じ

やない！」

卓也「バカってことは否定しないんだね……」

言つてやるな。スルーしておくのも一つの優しさなんだぜ。

京「でも、ワン子がバカなのは今に始まつたことじやないし気にしなくてもいいと思つよ」

大和「フオローしてるつもりなのかもしけんが、バカにしてるからな？」

岳人「体を鍛えるのもいいが、バカなんだからちつとは頭ン中も鍛えておけよ」

小雪「お前が言つなー」

そうだな。岳人もワン子と同レベルだろうが。

一子「な、なによ……みんなしてバカバカ言つて……」

みんなにバカ連呼をされ、泣きが入ってきた。

百代「コラ城私のかわいい妹をイジメるとは許さんぞ。よしよし、なでなで」

左手はワン子の頭を撫でて、左手は俺の顔目掛けて拳を放つてきたが、首を傾けて避ける。

岳人「モモ先輩のパンチをそんな風に避けれんのかよ

卓也「さすがはバグチートキャラだね」

自覚はしていたが、人に言わるとちょっとしつこい傷つくんだよな。

一子「えへへへ」

モモ先輩に撫でられたらしなく顔を緩める犬。尻尾がついてりやブンブン左右に振っているだろうな。

一子「お前ら調子に乗ってるからブチのめすわー！もちろん物理的にねーさあ勝負よー！」

復活はええなオイ。

城「黙れ犬。保健所に放り込むぞ」

一子「ひつー！」

ブルブルと俺の言葉と睨みに震えるワン子。

大和「尋常じゃない震えっぷりだな」

岳人「万歩計を腕につけりや、めっちゃカウントされんじゃね？」

京「完全に調教済みだね」

城「人聞きの悪い。俺はただあんまし牙を向ける犬にはちょっとしつこいお仕置きが必要だと、遠回しにいつただけだ」

一子「ガクガクブルブルガクガクブルブル！」

卓也「これのど」が遠回しなのさ！？もつゞしオブラートに包んで  
言つてあげてよー。」

そうしたら、バカなんだから伝わらないじゃん。

百代「おーよしよし。お姉様がその震えを止めてあげようじゃない  
か」

モモ先輩がと豊満な胸にギュッと一子を抱きしめた。

小雪「あははっ、あんなに威勢が良かつたのに震えてやんの～」

ユキのバカにした言い方にワン子はモモ先輩にからバツと離れ、喧  
嘩腰に戻った。

そのワン子を愛でていたモモ先輩は微妙に残念そうにしていた。

一子「なんですか、このあたしがそんな弱腰になるわけないじゃ  
ない！」

お前フ行前に戻つて、自分がどんな状態だつたか確認してみろよ。

小雪「やーいやーい、泣き虫ワン子やーい」

一子「このー絶対けちょんけちょんにしてやるんだからーー。」

逃げ回るユキをワン子が捕まえようとすると、すばりこじこじユキは  
ワン子でも困難な上に

卓也「タイヤは外そりつよ

モロが俺の代わりに代弁してくれた。  
みんなもうんうんと頷いた。

「……（後編）」（元ソニーブラウンのトランジistor）勝てねえ。アーローハメイエ。

終了時イベント その1

城「お疲れさん。今回の話はどうだ？満足できたか？できなかつたらもう一度読め。」

小雪「読め！田に穴が空くまで読むんだ――！」

城「もしくは日が乾燥するまで読み続ける。そしたら幸せになれるぞ」

小雪「一條宗教にはいれ～はいるんだ～」

「あなたはこの壺を買いたくなる。無性に部屋に壺を食いたくな

準一訴のわからぬ催誘をしない！催眠術を掛けでまで買わせようとするんぢやない！」

冬馬「一つその壺を購入します。私の部屋には華やかさが欠けていたので……この壺を置くとしますわ」

「こんなんで補えると思つてゐるのかー?」

城&小雪「「まいどおつ～」「

朝のHR前

卷之三

大和「おはよーっ！」

モモ先輩は3年。俺たちとは違うA棟なので校門より先で別れた。俺たちの教室は2-F。問題児と変人が集まされたクラスだ。どう考えてもクラス編成がおかしすぎる。父兄の方々から苦情が来ないのが甚だ疑問だ。

小説二女ノ「おせむり」ニ關する

城「はよつす委員長」

小説「アーヴィング」

真面目なところがいい。おしゃれだから。城ちゃん、ゴキちゃん」

城「ちゃんはいらない」

俺をちゃんと付けするどつみても小学生にしか見えない女の子は、田

々このアレな人たちをまとめる委員長さん。本名甘粕真与《あまかす まよ》だ。

純粋な心の持ち主で4月生まれってことで、やたらとお姉さんぶる一番お姉さんらしくないマスコットキャラ。このクラスにしちゃかなりの常識人だ。……外見を除けば。

小雪「マシュマロいる?」

真与「ダメですよユキちゃん。学校にお菓子を持ち込んだりしちゃファミリーのメンバーを除くFクラス内ではユキが委員長と一緒にいることが多い。

Sクラスに所属していたユキがFクラスに遊びに来た時にも委員長と話していたことも良くあつたしな。

なんか、ユキの不思議パワーと委員長の天然パワーが良い感じに吊りあつてているようだ。

千花「おはよー。朝見てたよー。モモ先輩も凄かつたけど城君も派手にやつていたね」

小笠原と委員長は親友同士らしく、ユキともそれなりに仲が良い。3人一緒に行動してる時もちらほら。

和菓子屋の娘なので、2人に割引してくれたりと意外な一面もあるらしい（ユキ談）

大和「弟分としてはやりすぎないかと心配だよ。城はまだ自制してるからいいけど」

城「あんな雑魚相手に力を出す程大人気なくねーよ」

卓也「つまり、モモ先輩は大人気ないって言いたいんだね」

うん。

京「…………」

京は既に席に着いて読書モードに入っていた。少しはコキを見習つて他の人と交流しようぜ……

大柄な男子生徒「一条君、師岡君おはよう。お団子食べる?」

城「おっ、いいのかクマちゃん。んじゃ遠慮なく貰つかせ」

卓也「それじゃ、僕もいただこうかな」

クマちゃん(仮)「はい、どうぞ」

プラスチックの箱から、一本の串団子を取る。

体が大きく大らかな性格であり、色々なグルメ店に詳しく、いつでもなにかしら食べている熊飼<sup>くまがい</sup> 満<sup>みつる</sup>(通称クマちゃん)。料理も上手く、食に関して彼の右に出る者はいない。

ヲタク「知ってるか我が同士たちよ? 昨日ゲーセンにaの新しいバージョンが入荷したらいんだってよ」

制服の下にオーダム(美少女アニメ)の女の子キャラがプリントされたシャツを着て眼鏡を掛けているこのヲタクオーラ全開の男は大串スグル『おおぐし スグル』

こいつにとつて一次元が全てであり、3次元は全力で否定する真性のオタ。こいつも変人だが俺とモロと趣味が合うので色々と情報交

換をしたり、ゲーセンや「ミケなんかに繰り出す」ともじばじば。

卓也「あのクイズゲームか。僕はやうなかつたけど、城とスグルはかなり極めていたよね」

スグル「大賢者ドラゴン組まで上り詰めたからな。全国ランキングも上位に入ってるだ」

眼鏡をクイッと上げ直す。

城「俺よりレート低いけどな」

スグル「むぐ……」

満「でもす、いよね2人とも。クイズみたいな頭の使うゲームで上位入賞だなんて。僕にはとても無理だなあ」

卓也「城は元々頭が良いから納得できるけど、スグルは何回もプレイして問題と答えを暗記してるだけだけね」

それはそれで凄いんだが。ゲームに注ぎ込んだ金は半端じゃないし、暗記するまでの精神力もよくもったものだ。

スグル「つーわけで、俺は今日麗しのアロエちゃんに会うためゲームに行くが城、モロ。お前らも来るか?クマちゃんもどうだ?」

ゲームのキャラ(しかも幼女)に麗しのと公言してゐるなんて相当末期だが。

オタじやないスグルなんてスグルじやないと思つのはこのクラスがアレの集まりだからだ。

城「俺も行くぜ。今週は生活費に余裕があるからな」

ユキが俺んちに食いに来る時の金はご両親からいただいてる（少し多めに）最初は断つたがお一方が「ユキちゃんといつとも仲良くしてくれてお礼よ。だから遠慮しないで受け取って」と言つてくれたので今では、ユキの食費代で余った金はお小遣いとして与えている（さすがに自分の物にするのは気がひける）

卓也「僕も行こうかな。この前はクリアできなかつたステージに挑戦したいし」

満「誘つてくれるるのは嬉しいんだけど、ちょっと用事があるから…」「めんね」

放課後の予定が決まつたところで、もうちょい喋つてから自分の席に。俺の席は窓際より一つ横にずれた席だ。前が「ていてい」ハンドグリップ持つて筋トレしている犬。左窓際の席は「…………」机に突つ伏して寝ているユキ。犬の前は岳人と会話している大和。その横ユキの前が司馬の本を読んでいる京。横、俺の後ろは……

城「はよっすゲンさん。今日も良い天気だな」

源 忠勝みなもと ただかつあだ名はゲンさん。岳人のお袋さんが管理人の島津寮で暮らしている。クールな性格でちょっと厳しいがめっちゃ優しいので、ツンデレとも俺は呼んでいる。

それと俺が強引に誘つてゲンさんは風間ポストファミリーのポジションに定置している。ゲンさんの気分によって、風間ファミリーで行動するそんな立ち位置だ。嫌そうに参加しているが、心の内では

楽しんでいる」とを俺は知つてゐる。

忠勝「なんだ? 悪いものでも食つたのか、きもちわり?」

心底嫌そうな顔をする。爽やかキャラを演じただけでそこまで毛嫌いしなくても……でもちゃんと相手してくれるだけましか。お、HRの始まるチャイムが鳴つた。

真与「みなさーん。小島先生がきますよー」

その知らせでクラス内が一気に騒がしくなる。

卓也「まあい、ちょっとそれ僕の漫画隠して隠してー!」

大和「ワン子、トレーニング器具机に出つぱなし」

一子「おつと危ない。ナイスアドバイスよ

城「ユキ~起きるー。眠いのはわかるが、鬼が去るまで耐えるんだ

小雪「わかつたー……」

千花「ちょっと、そこのオタクも寝てんだけど」

岳人「スグル、起きんど。鬼小島が来る時間だぞ」

スグル「ウオやべ……夜更かしがたたつちまつてな

真与「! みなさんー先生が! !」

委員長の合図と共に、みんなが背筋を伸ばしと正した。

ガラッと扉が横にスライドし、我がクラス担任の小島先生が愛用の鞭を持って入室して来た。

梅子「朝のH.Rを始める」

真「起立一礼」

みんなが元気良くあこがれをする。じゃねーとやつ直しがせられるからな。

梅子「おはよー。着席してよ。では出席を確認する。姫田速矢かに返事をするよ」

さつきまでの喧騒が嘘みたいに静かだ。この先生の前でくつやべってたら鞭打ちの刑だからな。血の命を捨てゆくやつは誰もいない。

梅子「甘粕真」

真「はーいー」

手を挙げて返事をする。やっぱ小学生にしか見えない。

梅子「ン。いい返事だ」

梅子「——一条城!」

城「ボンジュール」

俺はいつも通り気だるげにあこがれつつある。

フランス語で

梅子「一条、返事はいつも日本語でしろと言つてゐるだらうが、……まあいい」

なんど注意しても、更正できないうのを悟つてゐるのか。呆れてため息を吐くだけだ。

このクラスでこんな扱いを受けているのは

梅子「神原小雪」

小雪「うえーい」

力なく返事をするユキ。  
俺とユキだけだ。

梅子「…………お前らとこうやつちま…………。いへり罰を下さえてもまたく反省の色がないな…………」

鞭打ち 避ける 雜用 すぐになす 授業中に集中的に当てる  
完璧に回答

と、この様に俺とユキ（去年違うクラスだが、俺が問題を起こす時はユキがいることが多かったので先生とは面識がある）にとってはあまりにも軽すぎる罰なので、どうしたことはない。

城「人の顔色を窺つるのは好きじゃないんで」

梅子「だがその考えでは世の中は上手く渡つていけないぞ。ま、私はその考えは嫌いではないがな」

出席が再開される。

その間にクラスメイトの視線が俺を勇者を見る目を向けていた。フ  
アミリーのメンバーは先生と同じように呆れていた。  
よせやい……照れるじゃねーか。

梅子「うむ、これで出席を終了とする」

その後

カメラを持った猿「はあつ……はあつ……はあ、福本育郎います！」

息を切らして教室に飛び込んできた哀れな猿がそこにいた。  
福本育郎。変態。その言葉はこいつのためにあると言つても過言で  
はないくらいに性のことに関しては博識である。

あだ名はヨンパチ。これを付けたのは変態一号の岳人だ。どうして  
ヨンパチなのかは…………この2人から推測してくれ。

育郎「う、梅先生。セーフでしょうか？」

梅子「既に出欠は取り終えた」

鞭を床に叩きつける。

育郎「げ！？」

梅子「つまり、お前は遅刻ということだ

千花「（うわ。今来るとか…アホすぎるんですけど）」

卓也「（南無阿弥陀仏）」

岳人「（終わったな……ヨンパチのやつ）」

小雪「ポクポクポク……チーン」

城「どうして木魚なんか持つてんだ」

小雪「道端に落ちたから、拾ってきた」

なんでそんなもんが落ちてんだよ。

育郎「す、すみませんでした！」

頭を下げ、遅刻したことを謝罪する。

だが謝つただけで許してもらえるほど小島先生は甘くない。

梅子「理由があれば聞こう」

育郎「い、いえ、あの、朝起きたら凄い時間で」

梅子「寝坊というわけだ。情状酌量の余地もないな。歯を食いしばれ！教育的指導！」

ヒュンと空を切り裂く音を放ちヨンパチの体に苦痛を加える。

育郎「ギャア……いてえ……！」

梅子「痛くなくては覚えん！」

ムンクの叫びそつくりな表情で叫ぶヨンパチに容赦なく鞭打ちする。

梅子「お前たちもよく覚えておくといい。集団生活を乱すものには本来このぐらいいの罰が妥当なのだ! どうだ痛いか福本! 痛いのか! ?」

育郎「い、痛いです、痛いつ……痛いつハアハア」

いたぶられてるのに快感そうこじてるよ……あいつはMの気質があるようだな。

……よしつなら俺も人肌脱いでやるうじやないか。

城「先生」

席を立ち上がり、SMショーが行われているところ歩いていく。

梅子「なんだ一条? 今はここに罰を貰えているのだ。用なら後にじみ」

城「ちよつとこの猿に聞きたいことがあるだけです。すぐここ終わります」

しゃがみ込んで、床にへたりこんでいる猿に墨線をさせ、先生に聞こえないように小声で話す。

城「……(痛いのが気持ちいいのか?)」

育郎「ハアハア……(ああ。何度も打たれていながらに時々股間が反応するんだ)」

……それは痛いからだと思つゞ。でも、気持ちいいんだな。

梅子「終わつたか?」

パシパシと鞭の持ち手のところで手を叩く先生。  
俺はポケットに手を突っ込み、チート能力を発動させあるものを作り出す。

それは

「城一 なあ、ヨンバチ。お前は痛いのがいいんだろ？ で、梅先生はヨンパチが一度と遅刻しないようにトラウマを植えつけたい。なので

一呼吸おいて静かに告げる。

城「ヨンパチを宙吊りにしようと思ひます」

作り出した繩でを瞬く間に丑ノバチを逆さに呪る。

城「これで打ちやすくなるかと」

梅子「うむ。気遣い感謝する」

喜んでくれてなによりだ。  
んじゃ、俺は自分の席でゆづくつと鑑賞せらまらこますかね。  
席に戻る途中で京に

京「城はSタイプだね」

なんて言われた。

鞭のビンバシ叩き鳴る音とコンパチの快感の交えた叫び声が教室に響き渡った。

先生が教室から出るとほりつめていた空気が緩和する。なんか連絡事項とか言ってたけど忘れた。

満「福本君大丈夫? はいこのハーブ食べて。打ち身にいいからさ」

育郎「い、痛いけど……なんか、気持ちよかつたあ」

城「俺に感謝するんだな。あの縄で気持ちよさも倍増したんだからな」

育郎「おうよ、お前には感謝しても仕切れないぜー。」

城「……〔冗談で言つたつもりなのに〕マジで感謝されるとは……」

だめだこいつ……早く警察に通報しないと。

岳人、モロ、ヨンパチが鞭談議についていけんので自分の席に戻る。

一子「宿題写させなさいよ、大和」

大和「300円」

一子「何じゃその払えそつな金額！タダにすべきよ」

春休みの宿題か。もちろんそんなものを俺がやるわけない。

大和「委員長に見せてもらえばいいだろ」

一子「見せてくれなかつたのよ……逆に怒られてやー。毎日いつでも見せてくれると思ったのにね」

大和「厚かましいわ」

城「その通りだ。俺のように忘れたことを開き直れんのか」

廊下掃除でも成績を下げられても体罰が来ようと俺には通用しないぜ！

一子「城はテストで良い点取れるからいいけど、アタシはそういうもん。こういうところで点を稼がないとね。だ・か・ら、京にユキ宿題みせて〜」

京「はい。私からは現代文と歴史」

小雪「僕からは数学と物理。そおい」

京は手渡し。ユキは放り投げた。

一子「イエス！」

4つのノートをget and catenatedワンナメモリへ  
[写しにかかった。

大和「京、ユキ甘い」

京「いいよ。ワン子なら。なんでも見せる」

小雪「今度なにか奢つてもらひつかり、仮にしないよ」

城「ゲンちゃん。あなたは」のゆとり教育を心地お考えですか？」

腕を枕にして寝ているゲンちゃんに話を振る。

忠勝「知るがボケ。いちいち話をじつに持つてくるな」

起きてもだ、いちいち反応してくれる辺りホントにシンデレだな。

## 私、川神学園

名前の通り川神市の代表的な学校で、個性を重んじるための自由すぎる校則とユニークな行事・授業が特徴的。レベルはまあそこそこで生徒数が多い。よくワン子と岳人が入学できたなと思う事もそこにある。

中間試験は存在せず期末が勝負となる。

基本土日は休み。アルバイトOK。賭け事もOK。  
この学園の特徴として、他の学校にはない『決闘』つつーシステム  
があるんだが……説明するのがだるいので、他の人にやってもらおうとしよう。

ま、奇抜でアレな人が多い学園だが俺は俺で充実した学園生活を送っている。悪戯すんのも楽しいしな！

時は過ぎ……昼休み。

岳人「うおおおおおー開幕ダッシュー！」

育郎「岳人てめえ！フライングしてんじゃねえ！」

学食組みは猛ダッシュで食堂に向かった。俺は週に3回はコンビニ  
か購買で買つか、学食。残りの一日は俺手製の弁当だ。  
今日は適当に家に置いてあつたパンやおにぎりを持つてきた。

卓也「今日はいつで食べるんだ」

城「ああ。買い置きがあつたからな。モロは学食か？」

大和「俺もだ。クマちゃんに頼んでパン俺の分も買つてきてもらつ  
たんだ」

卓也「ううん。出遅れちゃつたから購買で買つよ。ちょっと朝買つ  
の忘れちゃつたからね」

そう言つてモロは購買に向かつていった。  
無事に帰還してくることを祈つてるが……ハムスター。

満「ベーカリー・ラクステイのパンはパイのようなサクサクついて  
う感じがいいんだよね。添加物を使つてないしクリームパンの自家  
製カスタードも絶品だよ」

人つて自分の趣味や得意なことを語るとときは饒舌になるからな。な  
に言つてんのかさつぱりわからん。

一子「へー。そのパン屋こじらじや聞かない名前ね

満「宮前の方だもん。朝一で買つて来たんだ」

朝っぱらからそんなとこまで行つてきたのか……

小雪「できたー」

授業中ずっと机と格闘していたコキが用紙を持ち上げ、出来を確認するよつこまじまじと見ている。

城「新作か?」

小雪「そだよ。25作品目」

京「今回のはどんなストーリー?」

小雪「それは見てからのお楽しみ~」

完成作品を俺たちに見えるよつに置く。なるほど、聞くより見ろつてか。

大和「昼飯の最中にコキの紙芝居か……」

一子「今回のはだ、誰か死んだりしないよね?」

大和と一子はあんまり見たくないようだ。

……コキの自作紙芝居はとにかくカオスだからな。見た後は食事する気分じゃ無くなるかもしねん。

小雪「それでは始まり始まり~」

始めやがったよ。

大和たちは腹を括つたのか食べるのを止め、紙芝居を見に入った。

口の中に食べものが入つてると吹き出すからな。前の作品では岳人の鼻からスペゲティが垂れていたし。

小雪「タイトルは、マリオの頑張り物語」

大和「タイトルからして、ヤバい氣がするんだが」

大和。お前も何度も見てるんだから、ツツコむのは止めとけ。後半からもたないぞ。

小雪「むかしむかし第3新東京市の藁小屋に真剣でリストラされたおやじ。略してマリオとおばあさんが税金に追われながら暮らしていました」

大和「いやもう何から何までおかしいだろ」

京「年金もらつてないんだ、この人たち」

一子「だいせんしんとーきょーとし? 東京市の別名なの?」

むかしに税金もリストラもないし、エヴァネタを使うなら初めから東京にしどけ。マリオの説明をしつかないと、あの某ひげおやじと勘違いするだろうよ。

なんで他が特殊すぎんのにおばあさんだけがそのまんまなんだ?

とかツツ「ミミどこが満載なんだが口には出さないで置く。  
後ワニ子東京は市じゃなくて都だからな。

小雪「おばあさんは川に洗濯しに。マリオは今日も生き延びるため  
に内職で作ったものを金に替えるべく街へ行きます」

大和「だからなぜにおばあさんは追加設定がないんだ?」

大和のツツ「ミミも虚しく、コキの話しさ続く。

小雪「ですが現実は厳しくお密さんはマリオが一生懸命作つたもの  
なんかには興味すら持ちません」

城「リアルすぎる……マリオが暗いオーラを背後に付け項垂れてい  
るのが、田に浮かぶぞ」

京「世知辛い世の中」

一子「可哀想なマリオ……」

小雪「そんなマリオに更なる辛い事実が襲い掛かります」

大和「なあユキ。お前マリオになんか恨みでもあんの?あるんだよ  
な?」

小雪「マリオは精神、肉体ともにボロボロになりながらも愛するお  
ばあさんがいる藁小屋へと帰宅します」

大和「いまさらだけビルや施設がある場所に藁小屋とか場違いも  
いいことだな」

京「マリオはおばあさんがいるから」  
和也「頑張れるんだね。いつか大

大和「ユキー 続けてくれ」

都合が悪くなつたらそれかい。

小雪「小屋に入ったマリオを迎えたのは中央にぽつんとある鍋だけでした。いつもならおばあさんが暖かく労つてくれるはずが、今日に限つておばあさんはいません。マリオは不審に思います。こんなことは今までになかった。もしかしたらおばあさんの身に何かが起こつたのかもしれない。マリオは一目散に川へ駆け出しました

大和「なんか不穏な空気が流れているんだが……」

京「フラグが立つたね」

一子「フラグ？ 差し込むんじゃなくて？」

城「そりゃプラグな」

ソケットと勘違いしてんのな。

小雪「案の定おばあさんは水死体となつて川にぶかぶかと浮かんでいました。世界に絶望したマリオはおばあさんの跡を追うように、川に身を投げたしたのでした。……めでたしめでたし」

『ど』がだつ……』

俺と京以外の魂の叫びを上げる。ビーフやハムクラスメイトもコキの紙芝居を聞いていたようだ。

てか、最後が投げやりだつたな。大方書いている時にめんどくなつたのだろう。

京「相変わらずコキの紙芝居は斬新で個性的」

大和「斬新すぎるわ！ 聞いていて鬱になるつてのー！」

城「夢も希望もねえな……作りもんなんだし、もうちよい救いようがあつてもいいんじゃないか？」

小雪「それが、現実」

笑顔で言つたよ。コキは紙芝居を机の横に置いて、鞄の中からコンビニ袋を取り出して昼飯を食い始めた。  
氣を取り直して……俺も食うか。

あちこちで顔が真っ青になる人が急増する中、ワン子がこの阿鼻叫喚一步手前の空気を変えるべくテレビを点けた。

アナウンサー「それでは次のニュースです」

昼休みはニュースを見るならテレビも許可されている。

アナウンサー「昨日の午後七時ごろ、埼玉県深谷市の飲食店で無銭飲食をした男が居合わせていた男子学生に取り押さえられました。調べによると男は今まで近隣で無銭飲食を繰り返しており、また窃盗品を身に着けていたことから警察では余罪を追求しています」

千花「取り押さえたの男子学生だつて。イケメンかな？」

真と「勇気ありますよね。凄いです」

みんな慣れっこなのが、既に自分を持ち直していく興味はテレビのニユースへと向けられていた。

しかし、学生に取り押さえられる大人か。だらしがねえな。

アナウンサー「男を取り押さえられたお手柄の男子学生は、神奈川県川崎市在住の風間翔一さんで、限定メニューを先に注文されて腹が立つっていたので本気で追いかけたと…」

あ、キヤップだ。

一子「ぶはっ！」

京「妙技ムーンウォーク」

ワン子が噴出した牛乳を華麗にかわした京。

一子「あ、じめん。ふいちやつたわ」

京「被害軽微。それより」

小雪「綺麗な虹を描いていたよー」

一子「えつ、マジ? 見損ねちゃったわ」

城「んなことより、早く床拭けよ。ほれ、タオル」

ついでに口も拭け。

千花「ちょっと…テレビ映ったの風間君！？」

卓也「…他にいないよね」

モロ帰つてきたのか。気づかんかった。流石は影の薄い（文字通り）男。

大和「今度はテレビかよ」

城「なにやつてんだか……わざと学校に戻つてこいつての」

小雪「この前は新聞に載つてたよね？」

京「うん。新聞からグレードアップしたね。当然これも新聞の片隅に載つてただけど」

笑顔でピースして、写っている写真が目に浮かぶな。

千花「うわ、凄いじゃん、さすが風間君…！」

真与「犯人逮捕に貢献なんてクラスの誇りですね！」

ひつとらえた理由がなければ話しだがな……誇るに誇れんだろう。

スグル「だからなんだってんだ。いちいち騒ぎやがつて。どっちかつづーと痛い部類じゃねーかよ」

賑わう女子に対し、大多数の男子はおもしろくなさそうだ。  
器のいいせえやううどもだな……そんなんだからお前らはキャップ

に勝てないんだよ（勉強面では勝てる

）

満「なんとまあ、いつもながら田立つ人だね」

城「いい意味でも悪い意味でもな」

我らがリーダー風間翔一は自由すぎる男だつてことだ。

で、時は過ぎ……放課後

城「ユキ。俺はこの後モロたちとゲーセンに行くナゾ、お前はまだ  
すんだ？」

帰りのHRが終了し、帰り支度をしているユキに今日の予定を聞く。

小雪「んー、僕はマヨと千花と一緒にクレープを食べにいく

廊下側を見てみると、しつけを楽しそうに見ている委員長と小笠原  
がユキが来るのを待っている。  
どこにも楽しい要素がないと思つんだが……まあいいや。

城「そうか。夜はどうすんだ？」

ついでに夜のことも聞いておく。一匂いで夕食を食いに来るのかをな。

小雪「城と食べる！」

教科書を鞄に入れていた手を止め、俺に顔を向け迷いもせず元気良く答えるユキ。

俺はユキの頭に左手を載せる。父親が娘を気にかける気持ちがなんとなくわかるな。

城「了解。じゃ、あいつらも待たせることだし俺は行くわ。楽しんでこいよ？」

委員長たちは反対側の扉の方に、モロとスグル、それにヨンパチが待っている。

あんまし待たせるとなんか言われるからな。

小雪「うん！」

屈託のない笑顔で頷くユキに見送られながら、俺は教室から去った。

育郎「来たなこの男の敵め！」

合流した直後にんなことを猿に言われた。  
なんだなんだ？

城「なにを言つてやがる」

スグル「嘆かわしい！たいへん嘆かわしいぞー城お前は2次元のみを愛する者だと思っていた！だが、現にお前は3次元の女とのリア充がー！」

城「はあ……？」

「こいつら……俺とユキのことを誤解してやがんな。

城「何度も言つてるが、俺とユキは幼馴染だぞ。恋人とかそんなんじゃない」

育郎「どう見たって付き合つてるようにしかみえねーよ。榎原は他の男に対する態度とお前との態度が全然ちがうじやねーか」

城「ユキは俺に懐いてるだけだ。あっちも恋愛感情なんて持つてねーよ」

卓也「ユキは昔から城にべつたりだつたもんね。ファミリーに入り始めの頃は城が一緒じやないと話さなかつたしね」

あの頃のユキは虐待を受けていたから、自信と言つものが薄れていたんだよな。

そう考えると今のユキは大分変わったよな。  
……いい意味と悪い意味両方含めて。

育郎「あのA A Aランクの極上女子と付き合わないなんてどうかしてるぜ。俺が一条だつたら、ユキつた初日に（閲覧禁止）」

スグル「三次元のなにがいいんだか。リアル女子は喧しいし我が儘  
ですぐ愚痴るしょ。それに比べて一次元の娘は（長いので中略）素  
晴らしい！！」

卓也「おーい、置いてくよー」

自分の世界に飛び立っているバカ×2を廊下のど真ん中に放置して、  
モロと先に行く。

育郎&スグル「ま、待つてくれ！！！」

慌て追いかけた。

……俺がユキとねえ。人生なにが起こるかわからんないからな。  
可能性の一いつとしては……あるかもしねりないかもな。

## 2・Fの変人集団と俺（後書き）

終了時イベント

城「一條城の一問一答シリーズ始まるぜー。」

小雪「はじまるぜー。」

城「このコーナーはパーソナリティーが（今回はコキ）適当に手紙に書かれた質問、悩み事なんかを俺か」

百代「唯我独尊最強美少女の私がズバッと答えてやるー。」

小雪「ぱぱぱぱぱぱぱ」

百代「その前にタイトルに私の名前が入つてないことはどうぞ」と  
だ。むさい男子なんかより、ピッチピチの女子高生の名が入つたほ  
うが視聴者受けがよくな

「

城「この企画は趣味でやるにすぎないんだ。多くの人に聴いてもら  
うんじゃない、やるからこそ意味があるんだ」

百代「なんだよ～私はかわいい女の子からファンレターとか手作り  
菓子を貰つた方がいいんだが」

城「じゃ、コキ記念すべき一枚田を読み上げてくれ」

百代「強引に話しを進めたな」

小雪「ほーい。ついんとペンネーム『マッスルマウンテン』からの  
お便りだよ」

百代「これを送ったのあの筋肉バカだろ。なにが筋肉の山だ」

小雪「『ブランド先生は時々この小説を書いたことを後悔に思つた  
ことがありますか?』」

城「……」

百代「……」

小雪「だつてや」

百代「うおい!」これ私たち宛じゃなくて、作者宛の質問だろーーー。」

城「一枚目が身内のやつからだとはな……」

小雪「びーするの?」

百代「どいつもこいつもないだろ。私たちじやなくて作者に答えて

「

城「いや俺が代わりに答える」

百代「おーーーのかよーーー!」

城「作者に為つきつて答えればいいんだ。ではズバッと答えてやる

!—!

百代「ズバッと答えるべきではないだろ……」

城「『ああ後悔してゐるわー』こんなクソ文書いてるなら一人あやといつてたほうがよっぽど有意義だ!!けどな、やらいで後悔するよりやつてから後悔したほうがスッキリするだろ!!』」

百代「作者の性格じゃないだろ」

小雪「在り来たりー」

城「手厳しいな」

小雪「あ。そろそろ終わりの時間だよ」

城「もうそんな時間か……始めてこしては上々だったな」

百代「どじがだ……こんなぐだくでいいのか?」

城「少しばかし適当なぐらこがちゅうどいんだ

百代「適当すぎんだろ……」

城「それじゃ読者のみんな。次回は本編で会おうな

小雪「ばいばーい

百代「……時間を無駄にしただけだつたな。それとギャラはいつ振り込

「

城「お疲れ様でしたーーーーー！」

ネギで始めて思いついたのがポーカロイドトやばい? (前書き)

タイトルまつたく関係ありませんww

ネギで始めて悪いのがボーカロイドってやばい?

城「ちーて、これからどうする?」

目的地のゲーセンに着いた俺たちはどの台から始めるか色々な種類の台を見極める。

卓也「自由でいいんじゃない? 待り合わせ場所と時間を決めて、集合。どうかな?」

育郎「俺はいいぞ。脱衣系にギャラリーがいると集中力が切れるからな」

堂々と言つお前は尊敬に価するぜ……悪い意味で。

スグル「ふつふつふ、アロハちゃんが俺を呼んでいる…… 同じよ、一足先にプレイしてくるだ」

育郎「じゃあ俺は脱衣コーナーに行くか。集合は一時間後でいいか?」

城「ああ。あのラタ眼鏡にも云えておいでくれ

育郎「おうよ。また後でなー」

俺とモロがその場に取り残される。

城「俺は札しかないから、小銭に崩していくわ

卓也「そつか。僕は格ゲー『ローラーの辺り』を愈つから、時間があつたら対戦しようよ」

城「うまをやつてからならな」

卓也「うん。じゃね」

モロはBGMやら人の騒ぎ声の混じった喧騒の中へと走つていった。一方の俺は人気のない不気味なぐらい静かな両替機に足を向けた。

城「千円でいいか」

紙幣挿入口に漱石さんを漱石をミンチにして、十枚の貨幣にへと変わり果てた姿に代えた。

硬貨をサイフの中にしまい、俺もうまをプレイしこいつと

ナンパ男A「なあなあ、嬢けやんよお。いい加減諦めて俺たちと良いことに行こうよ~」

する前に横の方から下品めいた声が聞こえた。

……！ んなどこでナンパか？

絡まれてる女性A「しつこいや。此方たちは貴様らのような下戯な輩と過ごすつもりはないと言つておるじやね」

ナンパ男B「は？ げせ……なんだつて？」

絡まれてる女性B「どうやら頭だけじゃなく耳も悪いみたいですね。何度も言わせてもらいますが貴方たちの誘いは断らせていただきま

す

ナンパ男A「こ、この…人が下手にでていりや調子に乗りやがって  
！…」

なんかナンパ野郎たちがヒートアップしてきてんな。女側の方も相手を馬鹿にするように挑発してるし。どちらも随分と強気だねえ。これは一悶着起こりそうだな。

ナンパ野郎たちは見るからに女好きプレイボーイみたいな姿勢をしている。冬馬よりださいが。

んで、制服からして他高生か。アホどもに絡まれてる不幸な相手は…「こからじゃナンパ男たちが壁になつて見えないな。ん?なんかカウンターにいる係員が受話器を片手に構えているな。いつでも警察に通報できるための準備は整つたつてわけか。

ナンパ男A「おらー、こちにきやがれ！…」

やれやれ……見て見ぬ振りをするのは遅すぎるな。めんどくしだが首を突っ込ませてもらおうかね。

絡まれてる女性A「此方たちが女だと思つて舐めていると痛い目を見るぞ！」

ナンパ男B「へつ、それはこちの台詞だつての！女だからつて手を上げないと思つたら大間違」

城「女に暴力を振るう腕はこの腕か？」

殴ろうとし、腕を振り下げる前に後ろから腕を掴む。

ナンパ男B「いだだだだだだだだ！な、なにしやがんだーー！」

城「てめえこそこなとこでなにをしてやがる。こじはゲーセン、ナンパや喧嘩をするとこじじゃないんだよ」

掴んでいた腕を振り払い、なんとも型になつてない武道もどきの構えを取る軟弱ナンパ野郎。

それにしても今田はやたらと不良もじかと出合つよな。……これも俺の運の悪さか？

ナンパ男B「んだとー！てめえボゴボコにして！」

ナンパ男A「待て！」

軟弱ナンパ野郎の片割れのビジュアル系男が、軟弱君を制す。

ナンパ男A「こいつじつかで見たことがあると思つたら、あの一条城だ！」

ナンパ男B「なにつー!?あの川神百代を凌駕するほどの強さをもつ！？」

……俺つて県内だと有名なのか？

ナンパ男A「こじは殺されないためにもわざと逃げ出すぞー！」

ナンパ男B「あ、ああ……」

こそこそと男たちはゲーセンから立ち去つていった。

その背中を見て、モデルガンで打ち抜きたいと思つたことは秘密だ。

カウンターの方を見てみると、係員さんが「良くやつてくれた！」  
と言わんばかりに超言い笑顔で親指を立てていた。

なんか近頃ああいう連中が増えているな……川神市の警戒  
態勢の質が低下してきたのかもしれんな。

城「あつ、あんたら大丈夫だつたか？」

絡まれていた女たちのことを思い出して、男たちがいたところに向き  
直ると

女性A「一 条……か？」

女性B「一 条先輩？」

着物姿の女と川神学園の制服を着た一年生が目を丸くして、俺の名  
を呼んだ。

……なんでゲーセンなんかにいんすか？

着物女「なぜお主がこんなにいるのじゃ～もしや、此方の執事  
だといふことに自覚を

城「そりゃ いひちの台詞だ。なんでお前みたいな名門家のお嬢様が

ゲーセンなんかにいんだよ。後、俺はお前の執事になつた覚えはない」

不死川「つれないのう。不死川家の系列に入るだけでも人生は薔薇色じゃというのになにが気に入らないのか……」

この年で人生の設計図つて早すぎだろ。俺はまだ青春を謳歌したいんだ。

やたらと俺を自分専属の執事にさせたがる年中着物姿のこいつは、冬馬や準と同じ選ばれし者たちの組の不死川心。  
不死川の名は九鬼には負けるが、世界でも五本の指には入る名門家。で、こいつはその一人娘つてわけだ。

なぜそんなやつが俺を不死川家に引き込もうとしてるのかって？去年の秋頃に町で柄の悪い連中に付きまとわれていたのを、たまたまそこに居合わせていた俺が追い払つたら……俺が不死川に付きまとわれる羽目になつたわけだ。

好意を持たれるのは悪い気はしないが、会つ度に執事執事と言つのはやめてほしい。

川神学園の制服娘「あの一條先輩、お久しぶりです」

一通り不死川と話しあつたら、アホ毛が特徴な女の子に話しかけられた。

お久しぶり？つてことは俺前にこの子とあつたことがあるのか。だけど俺の記憶には……

川神学園の制服娘「……もしかして、覚えてません？」

城「そそそ、そんなことないぜよーちょっと想い出すのに時間が掛

かつてゐるだけで……」「

川神学園の制服娘「口調が変わつていまսよ」

見知らぬ（向こうづめ俺のこと）を知つてゐる）女の子の機嫌が悪くなつてくるのがわかる。

思い出せ……思い出すのだーこのアホ毛とアホ毛とアホ毛と後輩が特徴的な……ん？アホ毛？年下？

あ。こいつはたしか……

城「思い出した！お前は中学時代で俺に難癖を付けて勝負を挑んできたのは良いけど、あつけなくコキに拒まれ、俺に触れる前にやられた富本か！」

富本？「酷い思い出し方ですね。それと私は富本ではないです。武む  
藏 小杉ですよ」

おおう。間違つて伝説の剣豪と勘違いしてしもつた。  
でも、おしいよね？

城「あ———武藏か。お前川神学園に進学したんだな」

……あれ？そういうやうにつ、他の県内の校に進むとか言つてなかつたけ？

小杉「え、ええ。まあ……（先輩と一緒に）が楽しそうだから、なんて口が裂けても言えな（）」

おおへちょいと顔が赤くなつてやせんか？

不死川「なんじゃ。2人は知り合いだったのか

小杉「は、はい。先輩は忘れていたみたいですが、中学校の時の先輩で時々私に武術を伝授してくれたりもしたんですよ」

ユキにテコンドーを教えているついでにだけ? 1人2人増えようが大した労力にはなんないし。

城「忘れてなんかなかつただろ。ちょっと名前を間違えていただけで……」

小杉「人の名前を間違えるのは忘れていた証拠です」

心「男と女。性別すら違うではないか」

すみません。ちょっとびし見栄を張つていました。

城「……で? なんでの名門家不死川と一般庶民の武蔵がゲーセンにいんだ? 繋がりがなにもなさそつなのに」

小杉「あ、私はU組みですよ。入学式の時にお世話になつたの」

心「ゲーセンといつものに連れてきてもうつたのじゃ。此方はこういう雰囲気が始めてで、胸がとつても躍つておる」

そういうことか。不死川がおいそれとゲーセンに来れるはずがないもんな。

ウキウキとしている不死川は子供が新しい玩具を手に入れたみたいで面白い。

小杉「そういう先輩は一人で遊びに来たんですか？」

城「んな寂しいやつじゃねーよ。クラスのメンバーと新作アーケードをやりに来たんだ」

モロとヨンパチは違うが。

心「ふむ……よし！ 決めたぞ！ 此方がそのゲームとやらに挑戦してみるのじゃーもひひんお前たちも来るのじゃー」

城「えー……き「なー」… あ早く案内せー！」一文字しか言つてないんだが……」

きだけで、拒否権つてわかるのか。

なんつーHゴイズム。なんで、俺の周りの女は最後まで話を聞こつとしないんだよ。

俺は不死川に引きずられながら、q m aの台がある場所まで指示した。それを後から追つてくる武蔵の田が「苦労してますね」と同情の視線を送つて來た。  
……だりい。

心「クイズマジックアカデミー……か。どういうゲームなのじゃ？」

イスに座つて画面を見つめる不死川。その両サイドに俺と武藏が待機している。

城「タイトル通り、次々に出されるクイズに答えていくゲームだ。ジャンルは様々。問題の収録数はゼットとアーヴィングは越える」

小杉「結構豊富なんですね」

城「しかも、自分のランクが上がつていぐ」とに問題の難易度も上がる。正直言つて、S組みのお前らでも答えられるとは限らんぜ?」

挑発するように言つてやる。

心「おもしろい。それは此方たちの挑戦じゃな?」

小杉「いぐり先輩でもその台詞は聞き捨てなりませんね。私たちの実力を証明してさつきの言葉を撤回させてもらいます!」

なんとも予想通りの返しをしてくれる。少しは冷静になることも覚えましょつ。

城「まあ、頑張りな。俺はデラゴン組み……最上部までいっただが。はたしてお前たちはどこまで進めることができるかな?」

初めてといふことで、2人で協力してプレイすることとなつた。

不死川「なになに……好きなキャラクターを選択してください?」

城「ま、誰を選んでも特に問題に影響があるわけじゃないからな。

適当でいいと思つた

ちなみに俺はユリをマイキャラとしている。男キャラでも良かつたのだが、スグ儿になぜか怒られたので、これ一つを選んだ。

小杉「どうします？不死川先輩」

心「そうじゃな……このシャロンとこう女にしてみないか？彼女を人目見た時にかが通じ合ひう様な錯覚に陥つた感じがしたのじゃ」

小杉「奇遇ですね。私も最初からこのキャラに田をつけっていました

心「では決まりじゃな」

ボチっと不死川がボタンを押し、画面が切り替わる。

小杉「キャラクターの名前を入力してください……プレミアムといひのはどうでしょ？」

心「なにが貴重なのかわからんぞ。普通にテキストでいいじゃろ」

シャロンとカタカナで打つて、決定を押す不死川。

武蔵は「私はプレミアムに好きなんだけどな……プレミアム……」  
とちょっと残念そうだった。

口癖をキャラに名付けるのはどうかと思つた。

小杉「モードを選択してください」

城「初めてなんだし、予習からでいいんじゃないかな？」

心「此方たちは選ばれし者じや。上に立つものが低レベルなことにチャレンジしてもなんの意味がなかろ?」これはトーナメントにてントリーするのじや!」

人のアドバイスを無視して、いきなりトーナメントを選択しやがった。

城「いいのか武藏? お前の意見を聞かずに勝手に進めてるが」

後ろで不死川に聞こえないように話す。

小杉「……力関係は私の方が下なので、あんまり生意気なことは言えません」

嫌なことを思い出したのか、眉を潜める。

城「あの時の〇 H A N A S H I で学んだようだな」

ビクつと〇 H A N A S H I の言葉に過剰に反応する武藏。さつきの武藏との邂逅話だが、もうちょっと続きがある。ユキのとび蹴りをくらって氣絶した武藏を俺とユキは屋上に連行したのだ(もしもユキを連れていかなかつたら、俺の沽券に関わるためだ。意識がない女の子を担ぐ男子生徒は傍からみたら、犯罪行為をしようとしているとしか見えない)

目を覚ました武藏は敗者だといつのに、生意気なことを語ってきたので、ユキと一緒に…………をした。

…………が気になる人は作者にでも聞いてくれ。とても俺の口からは言えねえ…………それでも答えてくれるかはわからんが。

小杉「…………もつ一度とあんな田ばいめんです」

青ざめた顔で囁つ武藏。ブルブルと震えているのは間違いではない。

心「まずは出題形式を選んでください……なんのじや？」

武藏と過去の思い出を穿りかえしていたら、不死川が俺に説明を求めてきた。

城「まずはセレクト総合を選ぶんだ。これはそのまま通り ×問題と選択問題が出題される。初心者には持つてここレベルだ」

タイピングは俺でもキツイからな。いきなりマルチを選ぶことなんて不死川でもさすがに

心「そうか。ならこのマルチセレクトとこいつは」

小杉「不死川先輩。」これは一条先輩のチコートリアル通りにしましょ。プッレミアムに酷い目にあわされますよ？」

不死川がまたアドバイスを無視して、マルチを選択しようとすると前に武藏が先にセレクト総合にタッチした。  
つか、最後のはいらんだろ。

心「別によいが……武藏顔が真っ青じゃぞ？」

小杉「ちょっとこのゲームセンター冷房が効きすぎですね」

城「苦しい言い訳だな」

まず冷房じたい付いていません。

モロたちに急用があるから帰ると嘘をついて、俺たち3人はゲーセンから出て、通学路に通る川原を歩いている。不死川と武藏との川原を歩くとはな。世の中なにが起こるかわからんな。

小杉「ん～～～～樂しかったー」

空高く腕を伸ばす武藏に

心「ふふん みたか一條此方たちの実力を！」

上機嫌でない胸を張る不死川。

うん。悲しいくらいに断崖絶壁だ。

心「む！今此方のことをバカにするよくなことを考えておらなかつたか？」

城「氣のせいだ」

俺の哀れみを込めた視線に気づいたのか、ムツと睨んできた。  
女の勘つてやつか？

城「それにしても、改めてお前ら3組の凄さを認識されたぜ……」

「いつこいつ時は話を逸らすにかぎる。そつすりや、大概のことは切り抜けられるからな。

で、こいつらは q m a 初見プレイの癖に全問正解でトーナメントを優勝した。なのに、まだ満足しきれなかつた不死川と武藏はもつと上を目指したいらしく、さらに高ランクのトーナメントに参加して……優勝。俺も恐れ入つたぜ……

小杉「勉強の成果ですよ。S組みだから勉学に入れてますから」

心「そつか、此方の事を見直したか。それならば此方のし「お断りします」む——！なぜじゃ！」

城「めんどい」

心「そ、そのような理由で……じゃが、此方は決して諦めぬからな！お前を此方の伴侶にするまでは！」

待て、執事から伴侶に変わつてないか？俺そつちの方が嫌なんだが。まだ人生の墓場に行きたくないです。

心「一條、武藏、此方はここで失礼するぞ」

そう言つと、高級ポルシェが俺たちの前に止まつた。すげ……この車売れば 1000 万は軽く超えるだろ。

執事らしきじいさん「心様。お迎えに上がりました」

心「うむ。いくわ！」

助手席に乗り込む不死川。

心「一條、武蔵。よければお前たちも乗るか？家まで送つて行ってやるかい？」

俺と武蔵は顔を見合す。

城「俺はいいや。あとちょっと着くし」

小杉「私は乗せてもらえるなら、よろしくおねがいします。少し……不死川先輩と話したいことがありますし」

心「ほう……此方も武蔵に聞きたいことがあったのじや。遠慮せずに乗るといいぞ」

小杉&心「ふふふふふふふふ（ほほほほほほ）」「

……な、なんだこの妙な空気は？お前の笑顔を見ていると肌がピリピリしてくる。

見ろよ、執事のじこさんなんてガタガタ震えていいんだ。

別れのあいさつを告げ、走り去り行くポルシェを見て俺は女つてこえーなと思った。

……つーか、俺の周りの女つて武道家ばかりだよな……はあ。

城「今思えば俺、ゲーセンでなにもプレイしてなかつたよな……なんのためにゲーセンに行つたんだ俺」

不死川と武藏のプレイを見ていただけだつたな。収穫と言えば、久しぶりに武藏と再会したことか（俺はあいつの」とを忘れていたが）

城「ただいまー」

我が安息の地に踏み入れたと同時に

小雪＆翔一「「おかえりー」「

ユキと放浪バカが笑顔で出迎えてくれた。

……

城「いや……ユキはことしてなんどキャップが俺んちにここの？」

翔一「埼玉に旅行つて買ったお土産を渡そうと思つてな。ほい

ネギを渡された。

小雪「居間にトーマと準がいるよ

城「あいつらもか？」

ローファーを脱いで、リビングに向かつ。

冬馬「おや、城君。おかえりなさい」

準「よつ、邪魔させてもらひつてる」「准

冬馬とハゲがチエスしていた。

……俺がいない間に色々な奴が着てるな。

翔一「いやあ、警察から開放されるの遅くなつちまつてしま。毎前には寮に帰れると思つてたんだけどな」

ドサつとソファーに腰をかけるキャップ。なんとも図々しい。  
ま、キャップだからいいけど。これが岳人が猿だつたら殴り飛ばしてることだ。

城「警察ね……一生世話をになりたくないものだな

翔一「でもよ、案外面白い人たちだつたぜ。俺が埼玉つて良いところねつて言つたら喜んじやつて彩の国の人良さを語られたよ

城「てかさ、なんで埼玉にいたんだ?」

翔一「バイト先の人が埼玉出身で。ネギとか牛とか特産品の話を美味そうにするんだよな。で、ふと食いたくなつて土口使つてフランフラン風のように旅に出たつてわけ

いつもの放浪癖かいな。

冬馬「旅ですか……いいますね、男性のロマンですよ

翔一「おつよー冬馬はわかつてんじゃねーか。城を旅に誘えれば「疲れるからいやだ」って断るんだぜ?ありえねーよ。」

城「金もかかるし、そう何度も行つてられつか。……ん?冬馬?なんだお前らもう仲良くなつたのか」

準「まあな。元々風間とは時々話してたしな」

翔一「う組みのやつは俺たちを見下すばかりだと思つてたんだが、ここからは別だ。ゴキの友達で高圧的な態度でもないしな」

小雪「準は腰が低すぎるのはどねー」

準「仕方ねーだろ。あのメイドで逆らつたら殺られる」

メイドといえば、あの腹黒女しか思いつかない。

傭兵と一般市民だもんな。戦つたら間違いなく市民は奴隸にジョブチエンジすることになる。

翔一「それより城ーー腹が減つたーーなんか作ってくれよーー」

小雪「ぼくもーーおなかすいたーー

じたばたじたばた。

駄々をこね始めた。お前ら幾つだと想つてんだ。

冬馬「私もチエスをしていたら小腹が空いてきましたね……ようしきればなにか作つてもえませんか?」

流し田はやめれ。

準「頼むぜ城。これをお前に貸し手やるからだ」

城「……CD？」

準「おうよ。幼女に愛され眠れないシリーズ『ヨルウ』  
おい！捨てようとするんだー高いんだぞー！」

城「ヤフオクに出品すつかな」

準「人が貸したものを作ろうとするんだー！」

城「安心しろ。一割冗談だ」

準「本気つて」とじやねえか！？」

小雪「じょーーハゲなんか相手にしないで」はんーー

準「なんかって……酷い」

翔「そうだーハゲより飯を作ってくれー」

準「ハゲハゲ言つなー」の髪型気にいつてんだぞー！」

髪ないじやん。

小雪&翔「じょーーおなかすいたーーー」「

育ち盛りの雛がさりにバタバタし始めた。

冬馬「私もお腹が空きましたよ」

準「めしゃ～めしゃ～」

れいじと雛が増えた。お前今まで便乗してんじゃねーよ。

城「はいはい……わかつたから静かにしてる。キャップに貰ったネギですぐにチャーハンを作つてやつからね」

小雪＆翔一「わーい！」

「うわーうわーうわー

城「だから転がんな！作つてやんねーぞー！」

準「そつ言こながらも飯を作つてやる城であった」

城「勝手なモノローグ入れてんじゃねーぞハゲ。チャーハンに王水いれんぞ」

準「入れんな！！死ぬからな！！」

俺が読んでるラノベだと生きてるんだけどな……ハゲには実験台になつて欲しかった……残念

冬馬「現実と一次元は“いつまでも”してさせられませんよへ」

声に出してないのに、心読まれた。

こうして夜は更けていく  
……

ネギで始めて思いついたのがポーカロイドってやばい? (後書き)

もうわかつている人はわかつていますが、この小説のヒロインは基本サブキャラです。

心と小杉の性格は原作に比べ、少し丸く納まっています。

運命の罰ゲーム!……邪氣眼とか写輪眼つてあるがれるよね? (前書き)

うお！4ヶ用ぶりの投稿かよ！

自分でもほつたらかしすぎたかなあ……スマソ！！

そういうやS!の発売が決まつたんだづけ

うん……ヨキはロインに追加されるんだろうか……伊予はなん  
かCGがあつたけど……どうなんだろうねえ……

運命の罰ゲーム！……邪氣眼とか写輪眼つてあこがれるよね？

翌日……4月21日。

いつも通りユキに叩き起<sup>ハシ</sup>され（今日は英和辞典を腹に落とされた）、今日も2人でだるい学校に向かう。

小雪「スイスーイ」

俺の前をローラースケートで滑走するユキ。  
何年か前、榎原老夫婦に買ってもらつたものを押し入れから引っ張り出してきたようだ。

城「人様に迷惑かけないようにな」

小雪「わかってるよー。イヒイ、トルネードスピング  
プロスケーターでさえ、困難なトリプルアクセルを決めるとは……  
俺だけじゃなくて、ユキも十分チートだよな。

城「やれやれ……朝からなんであんなに元気なんだ  
いユキ！前前……」

小雪「ん？」

「チー——ーン——！」

電柱に頭をぶつけた……つわあ……めっちゃ鈍い音がしたよな……  
あれは痛い。

城「お、おい。大丈夫か？」

その場でうずくまつているコキに駆け寄る。

小雪「うへへへへーき……ちょっと頭がパーンってなつただけ」

城「それは大丈夫じゃないだろー！」

普通だつたら、「額をぶつけただけだから」とか言つだろー！ただでさえ、コキの頭の中は童話に出てくる小人が住んでいりつてのに、これ以上アホの子に磨きがかかつたら手のつけようがなくなる！

小雪「失礼な」と考へてる？』

額を押さえながら、半眼で睨んでくるコキ。質問には答へず、コキの手を引っ張り起き上がらせる。

城「まったく……前方不注意だな。周りに『氣をつける以前の問題だろ』

小雪「聖徳太子のこと『氣を取られすぎりやつた』

城「なぜに聖徳太子……」

スピニ中で名前でも思い浮かべていたのだらうか……謎だ。

そもそも、こつものとこで大和たちと合流をする。今回はキャ

ツプも、そしてゲンさんも一緒にいる。

翔「ふあーあ。そこの川辺で昼寝してかね？」

大「それ昨日の俺も思つた」

城「いいな。こんな天気にあんな狭つ苦しいコンクリの中で勉強なんかしたくなーもんな」

小「日向ぼっこするならぼくもするーー」

翔「お、話がわかるな。んじゃ、そーしょーぜ。たまにはいいだろ」

俺、ユキ、キャップの3人で川辺まで降りようとしたが

忠「なにしようとしてんだ。遅刻すんだらが」

卓「たまについて……城とキャップはそんなのばっかりでしょ」

シンデレと地味に引き止められた。

城「あの大阪城を建築した豊臣秀吉は言いました……「戦地（学校）に行くならコンディション（睡眠時間）がベストの状態で行け」と」

卓「そんなこと秀吉は言つてないでしょ」

京「それに、その時代に外来語はないよ」

知つてるわ。ガチツツ「ミせんでいい。

翔「なんだあ。みんな良い子ぶつてよー。本性曝け出そーザ」

岳「今日は一時限目が体育で、俺様見せ場だしな」

城「お前の数少ない取り得だもんな。それでも、女子に注目されることがないが」

小「体毛の多いゴリラなんて見たくないって、千花が言つたよー」

岳「うおおおおおおおおおお！俺が必死に目を逸らしていた事実をあつむりと言いやがつた————！」

卓「容赦ないね2人とも……」

頭を抱えて、魂の叫びをあげる岳人。もてないつてことは自覚しているんだな。

いや、明確すぎるから自覚してなかつたら、どうかと思つが。

翔「むう、みんな乗り気じゃないのか。なら、同士を呼ぶか！誰か笛持つてきてる？」

みんなに呼びかけるキャップ。

京「当然。ブリーダーには必需品

大「俺も持つてる」

岳「俺様も。面白いからなこれ」

卓「うん。僕も持つてるよ」

小「あるよー」

忠「……あいつを動物扱いするのは気が引けるが……一応持つてきてるぜ」

携帯電話で連絡を取るよつ、楽で早いからな。みんなが持ち歩いているのもわかる。

大「城は？持ってきてないのか？」

城「自室の机の上に寝かしておいてある」

卓「つまり、忘れてきたんだ」

そうとも言へ。てか、そつとしか言わないか。  
なんか、いつ言った方がカッコよくないか？なんの脚色もなく「家に忘れてきた」と言うよりも忘れたつて言葉を使用しないで言つと、相手になんか事情があつたのかな？と思わすこともできなくなる……はず。まあ、ファミリーたち長年の友人には即刻バレるけどさ。

翔「ワン子呼んでくれ

大「じゃあいくぜ」

大和が笛を鳴らし、周囲に染み渡つた。  
音が鳴り終わる頃には、駆け足の音にシフトした。

卓「やつそく来たよ」

その晩の丑のワン子が軽快な足音と共に走ってきた。

「呼んだ――――――!? ていうか、おはよー。」

朝から元気にはいいが、もう少し声のボリュームを下げてほしい。

武たぐいへうたたニ

翔 - キハナノトモエ

「あら、変な意味で有名人じやない」

翔「俺が？ そうなの？」

昨日ＴＶに映つていたじやん。

「アンタのせいで牛乳少し無駄になつたのよ」のー

翔「いきなり理不尽な理由で蹴られるとかどんな教育?」

一「川神院的教育、肉体言語で語るのさ」

話し合いをしろよ。暴力で訴えようとすんなや。

翔「そーいやそうだった。ともかく笛吹くとすべ来る習慣は偉いぞ、いい味出してる」

「なによ。アンタたちがそうこの風にしたんでしょ」

俺たちにも非があるつちやあるが、まさか本当に身につけるとは思わないだろ普通。

お前の前世は間違いなく犬だろ？ な。種類は…………チワワ？ いや、こいつはわんぱくすぎるからな。  
うーん……バカっぽい犬か。……バカでアホでやんちやすざる犬つてなんだろな？

— 「ちよつと城。なんか物凄い失礼な事考えてない？」

犬ががるると牙を向けてきた。さすがは犬。直感も人間よりも優れているみたいだ。

城「考えてないぞ。ほれ、ちゃんとやつてこれたご褒美だ」

機嫌直しにビーフジャーキー（犬用）を渡してやつた。

— 「わーいわーい、肉だー。ありがとー」

中を開封し犬用のおやつをかみかみと呑える一子。

忠「……おい一條。あれ犬用のだろ？」

城「ああ。一子は気づいてないみたいだがな」

ゲンさんが小声で聞いてきた。

当の本人は幸せそうにビージャ（ビーフジャーキーの略）を咀嚼していた。

翔—「今の気持ちを英語で表してみてくれ、ワン子」

「子、「……こんぐりつしゅ？」

英会話が始まった。

忠「そんなもん渡すな。腹でも壊したらどうすんだ」

咎められるような睨みを利かしてきた。

結構な威圧感があるな……伊達に裏の仕事はしてないってわけか。

城「問題ないわ。袋には犬用と記されてるが、中身はちゃんとした人用だ」

酒のつまみ用だけどな！

忠「んなことしないで、未開封のままにしてけ」

城「そんなのじゅつまらんだろ。気づいたときのワン子の反応が面白そうだし」

忠「……アホか」

どうにも、ゲンさんはワン子のことにになると厳しくなる……まあ、元からキツメだけどそれが一段と増すというか……なんでだ？俺がユキを放つておけないよう、ゲンさんもワン子のことが心配なのだろうか？うーん……いくら考えてもわからん。ま、別にいいかこんなこと。

一「ベ、ベリー ベリー テリシャスミート……アイアムスーパー デリ シャスハッピー？」

訳すと『私はとても美味しいくて幸せです』  
……！」いつは食材かなにかなんだろ？

岳「お前馬鹿だよなあ。恥ずかしいやつだ」

一「あははっ！ガクトに言われたくないわね！」

卓「バカっぽいなあ」

京「実際にバカ」

小雪「……、ワン子はどうだ？」

城「他の誰よりもバカだなお前は。まさにキンブオブザバカの名に  
ふさわしい」

忠「あー、そのなんだ……強く生きるよ」

一「……な、なんだよ……イジめるために呼んだの？」

みんなでバカコール（ゲンさんは慰め）され、気が削がれ涙目にな  
るワン子。

大「取りあえずキャラメル系を食え系で」

ワン子の口に押し込む大和。

一「むぐむぐ系。おおこれはこれで美味しい系」

なに？近頃は語尾に系を付けるのが流行つてんの？

前世の時の年齢と転生してからの年を計算すると俺の精神年齢は三十路超えか……この世界で死んだらまた転生するのだろうか？

見かけは大人。精神と頭脳は老人！……そんなんのは嫌だ。

百「みんな揃つてるな。どした道端で」

ワン子のバカつぶりを観察してたら、モモ先輩がやつてきた。

岳「はて、これもともとなんの話しだつけか？」

大「ワン子、バカつて言い返すチャンス到来だぞ」

一「ぐまぐま」

大和の呼びかけに気づかずジャーーキーとキャラメルを頬張る犬。肉と甘いもんを同時に食つなよ。見てるこっちが気持ち悪くなつてくるだろ……

翔「……みんな揃つちまつたし登校するか」

卓「うん。サボつて鬼小島に田をつけられることがないよ」

岳「4月で担任として張り切つているだらうしな」

城「なら、俺は問題ないな。既にロックオンされてるし、どれだけ好き放題に行動しても咎められることはないだらうしな」

男らしいぜ俺！

グルつと家の帰路につこうとしたら

忠「どこに行こうとしてんだ。そつちま学園じゃねーぞ」

小「まわれー左っ！」

ゲンさんに肩を掴まれ、コキに180度回転させられた。

逃走は失敗した！くそつ……相手の方が素早さが上だつたか。

大「よし行くぞ」

翔「大和、号令はキャップたる俺の役目だ。さあ、行くぜ狂乱麗舞、風間ファミリー出陣だ！ワン子、先陣を切れ！泣く子がいれば黙らせろ！－！」

城「ふむ。キャップは泣き喚いでいる子供がいたら、無慈悲に蹴つ飛ばしてまで突き進もうと」

一「任せなさい！アンタならアタシに続けーーっ！」

ワン子の馬鹿でかい掛け声に遮られた。

……帰りたい。

京「ん？橋の上に誰かいるよ。」つち見てる

9人の大人数で橋を渡つてると、前方にきな臭をそうな男が橋のど

真ん中に突つ立てた。

他の生徒がうざつたそうにして、迂回している。

こっちはみんなじじい。

百「男か。……武道やつてる人間だな」

ワ「お姉さま田当てじゃないかしら?」

小「こんな朝早くから来るなんて、きっとあの人一ートなんだろー  
ね」

京「また挑戦者…か」

百「面白い。昨日のヤツらじゅつまらなかつたんだ」

あんだけテトリスで遊んだのに（人間で）物足りないと申しますか。  
これだから戦闘狂バトルマニア

は……。少しほ平穏に生きようとか思わないのかねえ。面白い事は  
好きだけど、疲れるから戦うのは嫌いだ。特に誰かから挑まれたと  
きは。

男「貴方が一條……城君?」

言つたそばからかよ。

モモ先輩じゃなくて、俺が田当てなのか。

城「……」

相手にするだけ無駄なので、さり気無く横を通りうと

男「ま、待ちたまえ！無視しないでくれ！！」

腕を掴まれ阻止された。

うぜえ……振りほどいて、川に投げ飛ばしてやるつか？

城「（ちつ死ねばいいのに……）確かに俺は一條だが……なにか用か？」

手短にすませる。5秒以内にだ。

男「え、ええ。あの川神百代を倒したと言われる貴方とお手合させがしたいのです（今舌打ちされたような……）」

後ろから凄い殺氣を感じた。この武道家らしき男の発言に腹を立てたのがわかる。

目の前の男より仲間であるモモ先輩の方が怖い……

雲「私は雲野重蔵。武の探求者だ」

誰も望んでいないのに、勝手に名乗つていくおっさん。

雲「高名な川神院の鉄心先生にお相手を願おうとしたところ、君が川神百代に勝てないと勝負を受けられないと」

百「……そういう仕組みになつてこる」

ぶすっと腕を組みながら言い放つモモ先輩。

なんで俺を睨んでくるの？俺は自分の意思でこの自殺志願者の獲物を奪つたわけじゃないんですよ？むしろ、差し上げます。

つか、あの老いぼれ俺の許可無く、条件内にいれるのはやめりつて  
言つてゐるのに……人の話はちゃんと聞けよなまつたく……

雲「では…いや尋常に勝負いたせ…」

城「断る」

ズルツ！

俺の返答を聞き雲野わ言わずとも、ファミリーのメンバー やギャラ  
リーがこけた。

雲「な、なぜだ！」

なぜと言われてもな……

城「めんどい、疲れる。朝から無駄な気力を消費したくない」

雲「な……そんな理由で……」

絶句するおっさん。

まあ、一番の理由は結果が見えているからだな。もちろん勝者は俺  
である。

京「相手が挑んできたら断る。でも相手が逃げ腰なら逆に追い討ち  
を入れる。城は天邪鬼」

大和「きまぐれなだけだろ」

翔一「自分の本能の赴くままに行動する。城も将来冒険かになれば

いここのよつ

嫌だよ。

俺は宝くじで3億当てて、その金で豪華客船に乗つて酔いまくるといふ立派な？夢があるんだ。

今考えただけだけど。

雲「……フフッ……フフフフ、フハハハハハハ……」

急に笑いだしたよ……こいつあぶない。

城「ユキ～近くの病院に連絡してくれ。頭に大変な病気を抱えた人が一匹いるって」

小「ほいよ～」

雲「やめたまえ！私は頭がおかしくなったわけではない……それと私を動物扱いしないでくれたまえ！！」

ちつ……患者を一人紹介すれば10万貰えたのに……命拾いしたな。しかし、こいつ俺が相手にしなければどうしてくれるそうにないな、別に無視してもいいのだが、だんだんギャラリーが増えてきたし……

城「はあ……気が進まんが相手してやるよ」

雲「ふつ……」

鼻で笑われた。

このじじい……今すぐこの橋から重しをつけて放り投げてやろうつか

雲「川神鉄心、噂だけの男だつたのかい！こんな平凡な氣の抜けた学生と試合しろだと？正氣の沙汰とは……」

……決めた、こいつ処刑決定。

城「氣の抜けた氣……ねえ、なら、お前が求めている氣つてのは……こうこう氣のことを書くのか！？」

『一？』

少しだけ力を解放し、俺の足元からブワッと氣が吹き荒れ、ファミリー以外の連中が俺の氣に圧倒される。相手に隙ができた。めんどくさうだしさつと片付けるとしよう。

雲「ぬおつー？……くそおー！」

瞬時に懐に移動した俺だが、さすがは武道家。すかさず拳を放つてくるが（やけにも見えるが）、屈めている俺には当たらず

ガシツー！

背後からやつの腰をガツチリとホールドして

雲「な、なにをするつもりかね！？」

この体勢といつたら……これしかないでしょー！

城「海老の真似ー！」

雲一  
ほたる！？！？！？

全力で仰け反り、やつの頭を変体橋にめりこませてやつた。  
プロレス技でいうジャーマンスープレックスをかましてやつた。

京一勝負あり

審判？のジャッジが下ると野次馬の連中がわっと歓声を上げた。死んではいなか確認を取るが、ただ氣絶してるだけだったので、伸びてゐる雲……なんとかを放置してみんなの元に向かう。

城「ただいま」

「おつかえり～勝利の曉にぼくを学校までおんぶする権利を

# 城 いりません

城「そんな元気があるなら自分の足であるけるだろー！」

京「大和私も「いやです」ぶう……大和のいけず」

卓「一人とも脈略がなさすぎるよ……」

意地でも俺に乗らつとあるロキの手をひりつと回避しまくる。

遅い……遅すぎる……

急ぎの用事で自転車をひいでる時に、風向きが向い風に変わった中

で「じぐスピードのように遅すぎるー！」

—「さすが私の師匠！ね、ね、さつきの移動術じゅうやるのー。」

小「ね～む～い～、城早くぼくをおんぶして～～」

城「ええいーそうべたべたと触るんじゃねえーー！」

百「そ、うだぞ二人とも。城をまさぐつていいのは私だけ…………お、中々引き締まつた体だな…………」

城「あんたはどいに触つてんだ――――――――――――――――――」

京「城は今日もモテモテで大変そうだね」

卓「本人は気づいてないけどね」

翔「あつ、ずりいぞお前ら！俺も混ぜてくれよーー！」

大「男女問わず城の人気は凄まじいからな。学園内でも」

岳「ういらやましいな～ちくしょ～。一度でいいから城と俺の立場を交換してもらいたいぜ……」

忠「やうこつのは夢ん中でやつてひ。ひぜえ」

で、10人といつた大人数で変態橋を渡る。  
さつきの武道家？

勝負が始まると同時にモモ先輩が川神院お墨付きの救護班を呼んでくれたらしい。

モモ先輩曰く、手段を選ばない外道たちには無慈悲な処刑が始まるが、ああいつたちやんとした志を持つた武道家にはフォローをしてくれる。

大「あ、キャップ質問。俺またバイトしようと思つたナゾを」「アホ

翔「任せとけ。河相がバントなら俺はバイトだ」

俺にひつついでくる4人を引き離す作業のせいで、余計な体力を使つちました（主にモモ先輩）さつきの試合より疲れたぞ……

大「なんかワリのいいやつないかな？」

翔「骨折のバイトがあるぞ。腕一本数十万だぜ」

大「ワリよくねーよ！医療関係だらうが勘弁だ」

城「腕一本差し出すだけで10万か……ナツコうーにかもな

外れた関節は自分でくっつけられるし。

小「そんじゃあ、ぼくが折つてあげる～」

城「むやみにやらぬでよろしく」

ユキが俺の腕に飛び掛ってきたので、腕を上げてひらりと回避する。

翔「ホモに追いかけられて、捕まつたら罰金というゲームに参加するか？」

卓「なにその闇のゲーム！」

城「捕まつた後はきっとH様のマインドクラッシュが……」

一「？～～～ワインドウズクラッシュ～～～」

忠「一子。前半の部分がおかしいぞ」

PC壊してどうするよ。

キーボードクラッシュヤーかお前は。

翔「2、3人捕まえると賞金でるらしいぞ」

岳「追いかけるまつなのかよ！」

岳人みたいな筋肉バカが参加するならともかく、大和のよつなやつが参加するのは危険すぎる。

捕まえたとしても、その後が…………考えるのはよそう。吐き気がしてきた。

卓「なんか今のジョーカじみたのネットで見たことがあるよーな。実在してると怖いね」

城「逆のパターンも存在してるかもな。超美人でかわいい女の子を捕まえたら賞金という

「「そのゲームどこで開催するんだ！？」」

レズ女王《モモ先輩》と変態帝王《岳人》が血走った田で迫つくる。

城「例えで言つただけだつての。それに岳人、お前は男だらうが……」

「…

そこまで女とにやんにやんしたいのか……

……なんか言い方が古くさかつたな。すまん。

百「なんだつまらん……。それなら城。お前の元壁な体にもつ一回  
触らせてくれ」

手をわきわきさせぬな！！

誰が触らせるか！！

百「逃げるつもりか！ユキ、ワン子、捕まえろ！！！」

小「ほーい」

一「え？お姉さま、城の体に興味があるの？」

俺を捕らえようとする、ユキとモモ先輩から上手く逃げる。

百「さつき服越しで胸板を撫でてみたんだが……私にはわかる。あれは最強の男が持つプロポーションだと！」

一「え、ええええええ！？」

いや、意味がわからないんですけど……ワン子はなにを想像したの

モモ先輩、俺が相手だからって容赦がないんですけど！

ユキはユキで俺が教えた技を駆使して、攻撃してくるし……なんで朝からこう戦闘ばつかなのかなあ。

岳「理想の筋肉といつたら、俺様の体に見とれるはずなのに、なん  
で城なんだよ！」

卓「岳人のはなにも考えずに鍛えてるだけだから、暑苦しい位置に筋肉があるんだよきっと」

岳「なんだとモロ。お前遠まわしに俺をバカだつて言ってねえか?」

卓「（あ、岳人でもわかるんだ）」

忠「…………やれやれあさつぱら元気なやつらだぜ…………（かく言つ俺も  
この日常を楽しんでるみてーだがな…………やれやれ。あのお人よしの  
バカのせいだな…………つたく）」

翔「ああっ！今から城を捕まえれば賞金をもらえるんだな！俺も行くぜーーー！」

大「おいキヤッP！……主催者もスポンサーもないのに、賞金が  
出るわけないだろ……京？」

京「城翔岳卓」

大「（……聞かなかつたことにしよう）」

今日も風間ファミリーは暴走気味である。

その訳30メートル後方に一人の女の子がファミリーたちを凝視していた。

? 「はあ……楽しそうだなあ。面白い人たちですよね松風」

松? 「面白いといふか、おかしいといふか、微妙なラインじゃないかな?」

? 「いやちつこつこと言ひてはダメです」

松「「めんよー」

? 「同じ寮どこうことで仲間に入れないかな?」

松「がんばれまゆっちー!まゆっちなら出来るー!フレキシブルな考え方で行くんだぜー!」

がんばれまゆっちー!君の未来は明るいぞ!

多分

それより10メートル後方

小杉「あそこにはいるのは一一条先輩にその他皆さー……一聲かけようかな?でも馴れ馴れしい娘だつて思われるのはブッフレーミアムに嫌だしなあ……」

心「むむっ!あの後姿は一條にその他多数ではないか!楽しそうじやのん……此方も仲間に…………はつ!?なにを考えておるのじゃ!……高貴なる此方が一緒に混ざりてバカ騒ぎをしたいなどと……」

「……」

しばし見詰め合ひ「一人。

「「あわわわわわわわわっ!不死川先輩!?!?（によわーーーーー!武蔵!?!?）」」

小杉「いいい、今の聞こえていました?！」

心「そもそも、そなたこそ此方の話を耳にしたのではあるまいな

!?

「……」

また見詰め合ひ「一人。

小杉「不死川先輩」

心「武蔵」

「「仲間ですか（じゅーだん）」

なにか思ひとこがあつたのか、抱き合つ一人。

……」の一人、先ほどの一 年生と気が合つのかもしれない。

そして、せりに一〇メートルほど後方では……

準「ああ……幼女は手折るもんじゃねえ。愛でるもんだ」

冬「おやおや。準はホント小さな子供が大好きなのですね

準「俺にとって幼女を崇拜するのは人生そのものーちつちつやい子と風呂に入れるなら、魂を奉げてやつてもいいくらいだ！」

冬「でしたら、美少年の小学生も範囲に入れたりビリです？」「

準「ふはっ！－若、俺までB－の世界に引きずりこもうとしないでくれ！俺はあの純粋無垢な小さい女の子にしか興味はないんだ！！！」

冬「そうですか……私はそっちのほうがいいんですけどねえ」「

……今日も変態橋はおかしな人でいっぱいだった。

運命の罰ゲーム！……邪氣眼とか写輪眼つてあいがれるよね？（後書き）

終了時イベント

大和「今日はこれで終わりか。また次話で会おうな」

岳人「そして……愛を捨て哀に生きる者の祭が始まる……」

忠勝「始まんねーよ。やるなら他のアホどもとやつて」

卓也「参加したくないなあ」

城「自ら、負け犬つてことを認めるもんだからな」

翔「そんな」とよりみんなで城の家に遊びにしてやせ……」

そろそろ

岳人「って……あれ？おーいみんな？どこに行っちゃったんだよー

——

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0757o/>

真剣で怠け者に恋しなさい!

2011年3月28日00時45分発行